
神は見ている

ソメイヨシノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神は見ている

【Nコード】

N8859M

【作者名】

ソメイヨシノ

【あらすじ】

ある町で幼女殺人事件が起こる。
逮捕されたのは8歳の少年だった。
それから20年の時を経て、その事件は色褪せる事なく、類似した事件が巻き起こっていた。
そして20年前の事件は解決したにも関わらず、幾つかの謎が残ったまま。

刑事である主人公は、この事件を終わらせなければならない。
絶対に。

正義と悪、本当に強いのは、どちらだと思いますか？

1・キリスト事件

アグルスのドゥール地方、ダンルという小さな町で起きた事件は、誰もが知っている。

かの有名なキリスト事件だ。

ルーセン・C・ファークレイ。

当時8歳の彼は、毎日、教会に通うのが日課だった。

家にいれば、両親からの虐待と祖父母による仕打ちに耐えなければならなかった。

母親はまだ幼い彼に、「お前が女だったら男に売って金儲けできたのに」と罵り、父親は酒を飲みながら、殴る蹴るの暴行をし、祖母はそれを見ていながら、助ける事もせず、彼を扱き使うように、あれをしる、これをしると命令した。

学校では当然のようにイジメられる存在であり、見て見ぬふりをする先生もいれば、執拗以上に身体中の傷の理由を尋ねたり、それはまるで興味でしかないように思え、彼は脅える日々だった。

そんな彼を救ったのが、町の教会だった。

たまたま通りかかった教会の前。

復活祭が行われており、外の通りに迄、聴こえて来る聖歌に、彼は足を止めたと言う。

教会の中は基本、誰が入っても構わない。

彼は教会が醸し出す独特の雰囲気と礼拝堂の美しさとパイプオルガンの音色と十字架に磔にされたキリストのモチーフに、一瞬にして心を奪われた。

世の中には、こんなにも神聖で、美しくて、邪悪さが全くないものが存在するのだと涙さえ溢れたと言う。

それから彼は毎日のように教会に通い、十字架に祈りを捧げ、神父も彼を受け入れた。

只、彼は祈りに来る一般人と変わりなく、やはり、ホーリーネーム

をもらったり、イベントに参加できたりするのは、信仰心だけでは無理な話だ。

それなりの寄付金などが必要となるのだ。

そんな金、彼に用意できる訳がない。

彼は自分の生い立ちを悔いたのは、初めてだった。

両親に何をされようが、何を言われようが、祖父母にどう扱われようが、彼はそこで生まれた以上、脅えはしても、そうして生きていく事に抵抗さえなかった。

だが、どうだろう、信仰心も然程ない癖に、金さえあれば、ホーリーネームをもらえ、一般以外の日でも、神聖な場所に入入りできて、神の御加護を全身全霊で受け、まるで神直々に愛されているような顔で、聖書の意味さえ、理解しているのか、わからない連中がいる。この世は不公平だと気付かされる。

ある日、ルーセンは女の子に出会う。

彼女は、その教会の信者であり、正確に言えば、親が信者であり、彼女自身も両親と弟と、日曜日になると必ず教会に訪れていた。

彼女のホーリーネームはハニエル。

彼女はルーセンと出会った時に、本名ではなく、このホーリーネームで、自分呼んだ。

ルーセンは直ぐにわかった。

その名は美の天使であると。だから彼は教えてあげた。

ハニエルは、権天使と力天使の序列を支配し、金星、十二月、天鵝宮と双鱼宮を支配する事、神秘主義の十の生命の樹では大七のセフィロトに宿るとされる事、魔術においては、ハニエルは寵愛を勝ち取る為に呼び出され、また、愛と美を支配しており、愛情、平和、調和の為に呪文で召喚される事など。

彼女はハニエルというホーリーネームが、天使の名前であると知り、その天使の様々な話を聞ける事から、ルーセンと関わりを持つ事を好んだ。

ルーセンもまた、彼女に好意を抱いた。

自分の身体についた傷などを気持ち悪いと言わずに、しかも対等どころか、彼の話を楽しそうに聞いてくれて、尊敬の眼差しさえ浮かべ、笑顔を見せてくれて、そのように傍にいてくれる同年齢の人は初めてで、不思議な気持ちだったと言う。

それがルーセンの初恋だったのかもしれない。

そして彼女は殺害される。

いつもの日曜日の朝、彼女は両親と弟と共に教会に来て、祈りが終わると、弟と共に教会の中庭で遊んでいた。

両親は神父の有り難いお話を聞く為、礼拝堂に残っていた。

弟がトイレに行った時、彼女はルーセンと出会い、ルーセンと一緒に教会の外へ出て行く。

その後、彼女は行方不明となり、捜索願も出される。

ルーセンは、教会の一般出入りが許可される午後には、教会で、いつものように十字架を見上げ、祈りを行い、聖書を読んでいたのを神父も目撃している。

そして次の朝、彼女は海岸の砂浜で遺体となって発見される。

白い砂が広がる中で、その砂に描かれた翼の真ん中で手を広げ、まるで天使のように。

外傷は殆どなく、解剖結果で、殺害方法は毒薬だと判明。

だが、手の平に、十の傷跡があり、犯人からの何らかのメッセージかと思われた。

その一週間後、また別の幼女が、砂浜で、遺体姿で発見される。

そのまた一週間後、今度は赤ん坊が同じ場所で殺害された。

その両方が、最初の事件と異なったのが、殺害方法は刃物で肉を裂かれ、外傷に酷い傷があると言う事と、地面には何も描かれてなかった事、そして手の平に十の傷跡がなかったと言う事。

その為、これが連続殺人かどうか、犯人が同一か、判断がし難くなつた。

被害者の共通点は、被害者を含めた家族全員が教会の信者である事。

犯人は、教会の神父であると言う噂も流れたが、神父にはアリバイがあった。

そして、赤ん坊の遺体が見つかって、その3日後にルーセンが捕まった。

逮捕に至ったのは、教会で赤ん坊が泣き騒ぎ、母親があやしている所に、ルーセンが面倒をみてあげると声をかけ、その後、赤ん坊とルーセンがいなくなった事からだった。

逮捕に3日かかったのは、ルーセンがまだ8歳だっただけで、ルーセンそのものの存在だっただけ。

いつも教会で見かける少年は、その赤ん坊の母親の目に、信仰心が強く正義に溢れた少年に見えたと言う。

着ているものや体の痣など関係なく、神の意思に背く事なく誠実な子供に見えたのだ。

ましてや、虐待を受けた傷は信者達には痛々しくも神々しさ迄に感じられた。

拷問に合うイエス・キリストを連想させられたのだ。

また彼の父親がアルビノ遺伝子を持ち合わせていた為、彼は色素が薄く、真っ白な肌に水色の目をしていた。

それはイエス・キリストと同じだと、この教会では語られている。

それ所か、ルーセンはとても頭が良く、聖書や偽典さえも全てを暗記してる程で、8歳とは思えぬ程、知的で理性的で、言葉を交わすだけで、教会に通う者ならば誰もが彼を神の使いじゃないかと言い、褒め称える程のカリスマ性を見せた。

神父の変わりに、一般の話聞いてやるなどもこなし、キリストの生まれ変わりなどと唱える者や神の復活を信じる者さえもいた。

その為、ルーセンが連続殺人鬼だっただけと知った者達の中には、被害者はキリストの復活の為に生贄となったと狂言する者も現れ、ルーセンは神の子キリストの生まれ変わりで、被害者はホンモノの天使となったんだと言う者さえ、いたと言う。

だが、彼が犯した罪に理由などない。

何故なら、後にルーセンはこう供述しているからだ。

「理由？ 理由なんてなくて、只、そうしてみたかったんです」
そして、彼は、取調べの最中、被害者を「それ」としか表現しなかつた。

その後、アグルスでは猟奇事件と少年犯罪が増え、中でも？サイレント事件？は未解決であり、今も尚、続いている事件である。

2・悪魔崇拜

ここ数ヶ月、少女を拉致し、レイプした後、刺し殺し、走行中の車から捨てられる事件が多発していた。

少女は皆、髪の毛が長く、15歳から18歳までで、白人だった。そして死体の手の平には、刃物で傷付けられた十の文字が刻まれている。

走行中の車から死体を捨てる事から、犯人は複数いる事がわかり、しかも手の平の傷からして、またもキリスト事件の影響であると思われる。

またも言うのは、キリスト事件の犯人である少年を崇拜する者なのか、それとも自分の犯した罪を少年になすりつけたいのか、アグルスでは、被害者の手の平に十を描く事件が多い。

キリスト事件はもう20年も前の話。
少年も15年の刑を終え、世に出ている。

その後、少年がどこで、どうしているのか、誰も知らない。

少年の両親は亡くなっている。

少年が犯した罪は重く、もともとアルビノ遺伝子を持ち合わせた父親に、日中で働く仕事はできず、昼間から酒を飲んで過ごしていた日々が、全く仕事がなくなり、酒さえ買えなくなり、世間からは非難され、自殺した。

アル中だった彼は誤って道路に出してしまい、事故になったという話もある。

母親の方も息子が起こした事件のせいで、売春婦としての稼ぎがなくなつた。

いつもの仕事場となる古いモーテルで、大量の薬を飲み、手首を切つて、風呂場で発見されている。

少年に殺された被害者の身内が、自殺を装い、彼女を殺したという話もある。

祖父母も他界している為、少年は身寄りがなくなり、今現在の彼を知る者はいないし、もう終わった事件だ。

事件さえ、当時の人間達以外には、もう闇に消えてもいい。

だが、今の時代、ネットで直ぐに検索できる。

？悪魔？？猟奇的？？少年犯罪？？キリスト？？ハニエル？？ルシファー？？などのキーワードを検索すれば、当然のように出てくる事件だ。

勿論、その殆どがルーセン・C・ファークレイが犯した罪を怒りや憎しみで綴っているが、中には彼を「ルシファー」と呼び、彼を崇拜しているホームページもある。

実際にルーセン・C・ファークレイという名が世間に公表された事はない。

だが、その名がどこからか漏れた事で、彼の名に愛称をつけ「ルシファー」と呼んだのかもしれないし、もしくは墮天使のルシファーをイメージしたのかもしれない。

どちらにしろ安直でわかりやすい為か、キリスト事件の犯人はルシファーとして世間に広まっている。

こうしてキリスト事件のルシファーは、今も尚、語り継がれ、恐怖を世間に広め続ける事で、崇拜されている。アグルスの警察は民達から絶大なる信頼を失っていた。

犯罪の予防や治安の維持ができていない。

犯人逮捕にまで至っていない事件もある。

この事から人々は警察に頼っても意味がないと、例え被害者が生還したとしても泣き寝入りし、警察に通報していない事件もあると予測され、アグルスは世界的に最も猟奇的犯罪が多い国とされた。

しかし、決してアグルスの警察が無能である訳ではない。

犯罪捜査部門も幾つかに分けられ、殺人、窃盗、詐欺、誘拐、交通、薬物など、それぞれ捜査課が違い、主に町中のパトロールを行う者や町に設置された連絡だけを行う小さな施設内で過ごす者が通報を受ける、現場に向かい、被害者などの様子を見て、どここの捜査課

に来てもらって犯罪を明らかにするのか判断する。連絡を受けた捜査課は現場に向かい、事件を追う事となる。

たまに殺人なのか、誘拐になるのか、わからない場合、両方に連絡をし、捜査を続ける中で、管轄外だと捜査を打ち切る課も少なくはない。

捜査課は制服などなく、私服であり、警察であると言う証明のカードを見せない限り、警察である事は伏せる事ができる。

警察内は捜査課だけでなく、事務課もあれば、研究課、科学課、調査課などもある。

犯人の残した手掛かりを探る為、どの課も協力し合い、事件を解決へと持つて行く。

だが、アグルスの警察は舐められたもので、またも1人の少女が犠牲になるうとしていた。

？少女連続レイプ殺人事件？の主犯格は今日も17歳の少女を狙っていた。

車から、学校帰りの少女を見つけ、長い髪と白い肌に舌なめずりしながら、眺めていた。

「おい、えっと、お前、なんて言ったっけ？」

「シンバ」

「え？」

「シンバ」

「ああ、そうそう、ライオンくんだ」

笑いながら主犯格の男は後部座席の真ん中に座る男を見て、そう言った。そして、

「あの女。あの女にする。お前連れて来いよ」

「・・・・・・・・」

「初仕事は怖いかな？ 大丈夫だって！ 俺達はさあ、もう顔がバレちゃってる可能性があるし。わかるだろう？ 狭い町だからさあ。お前を仲間にしたのは女を連れ去る役の為だよ。心配すんなって！

後でちゃんとお前もやらせてやるからさ」

「うん」

シンバは頷くと、外に出る為に、隣に座っている男と一緒に車から降りる。

男は再び、車に乗り、ドアを閉めると、ここから見守っていると言う合図を送る。

運転席の主犯格もニッコリ笑い、大丈夫という安心を与える。

だが、その表面とは裏腹の声を聞く。

「アイツ、びびってんじゃねえのか??」

「あんな大人しそうな奴が、うまくやれるのか??」

「なあに、うまくやれなかつたら、殺せばいいさ。俺達の顔を知られたからな？」

男達の唇がそう動き、シンバはフツと笑いながら、お目当ての少女の所に向かう。

戸惑ったのは、少女に声をかける事だった。

28歳という年齢の癖に、シンバは、女の子に対しての免疫はない。その為、好感を持たれ、素直について来てもらえるのは無理だと思っ

う。ましてや17歳の女の子から見たら、28歳のシンバは童顔とは言え、相当な年上だ。

警戒されて当然。

だが、要はうまくやる事。

つまり少女を車に乗せればいいのだ。

それなら力尽くで少女を乗せればいい。

白昼だろうが、なんだろうが、そんなもの関係ない。

そこまで指示されていないのだから。

なるべく車の近く迄、少女が来るのを待ち、そして、シンバは道を尋ねた。

「すみません」

「……はい」

事件が多い町で、少女は見知らぬ男に声をかけられ、体を硬直させ

た。

警戒心がピンピン伝わってくる中で、

「駅はどう行けば？」

表情ひとつ変えず、そう言ったシンバに、少女は指を差し、

「ここを真っ直ぐに行って」

と、案内を始めた瞬間、少女の口に丸めたハンカチを押し込み、声が出ないようにすると腹部に軽く拳を入れ、前のめりになる少女の首に腕を回し、抱きかかえると、あっという間に車の三番目の座席に放り投げた。

主犯格の男と残りの2人の男は、啞然とする。

余りにも素早い犯行で、悲鳴さえあげさせなかった割に、少女は意識もあり、無傷に近い状態で車に乗せられたのだ。

何が起こったのか、全くわからないまま、気がつけば、車の中。

だが、男が3人もいるし、シンバも含めると4人もいる。

怖くて脅えるしかできない少女に、男達は笑った。

そして、シンバを褒め称える。

「お前、すげえな！」

「よし、これからは女を車に乗せるのは、お前の役目だ！」

「やっぱり俺の目に狂いはなかっただろう？ コイツはやる男だと思っていたよ」

などと、はしゃぐ。

そして主犯格は、少女達をレイプするいつもの場所へと車を動かし、残りの2人は少女の鞆を開け、持ち物をチェックしている。

「ねえ、この辺でさあ、レイプされて殺されて捨てられる事件があるの知ってる？」

少女に話しかけ、少女の恐怖心を煽る男達。

「学校で言われなかった？ 知らない男には注意するようになって」

「生徒手帳とかどこにあるの？ 名前とか知りたいからさあ。鞆の中になんだけど」

そう言った男に、

「名前なんて知らない方がいい。どうせ殺すのに」

シンバがそう言った事で、少女はワァツと声を上げ泣き出し、窓をドンドンと叩き、助けてと叫び出した。

「無理無理。防音になってるから。ドアも窓も運転席でしか開けられないしね」

と、笑う男達。

やがて車は人気のない場所を走り出し、山奥の廃墟へと辿り着く。

ナンバーのない車を止め、主犯格の男はキーと銃をシンバに投げ渡すと、

「女を連れて来い。面倒だからな、暴れないよう、銃でも突きつけてな」

そう言つて、車を降り、他の2人も車を降りて、廃墟へと入って行く。

シンバは一番後ろのドアを開け、銃は使わずに、少女を車から降ろした。

こんな山奥で人の気配が全くない場所に連れて来られ、逃げる場所すら想像できず、帰り道もわからなくて、それはもう恐怖過ぎて、抵抗すらできない少女に、武器は必要ない。

黙って廃墟へ入る少女とシンバ。

他に男達の仲間はいないようだ。

シンバを含め、4人の男。

武器も隠してある訳でもなさそうだ。

今、男達が手に持っているナイフやら銃やら、それだけのようだ。

「よし、まずは女の手の平にルシファアのマークを刻む。シンバ、

お前は今日が始めてだからな。覚えておくがいい。キリスト事件のルシファアを知っているだろう？ 俺達はアイツのファンみたいな

もんだ。俺達はルシファアの事件の記事は必ずスクラップし、ルシファアの本は必ず買い、ルシファアについては何でも知っている！」

ヤバイくらい興奮して話す主犯格に続き、他の2人も、興奮状態。

「当時、オレは5歳だったんだけど、ニュースを見て、ルシファア

が8歳と聞いて、5歳なりにすげえって感動したよ。よくやってくれたと迄、思ったね！ や、ホント、5歳のガキがよ？ 国中が恐怖で支配されて行くのをゾクゾクしながらテレビに釘付けになって見てたね。みんな、そうだよ、そう思ってる奴、結構いるよ、只、ルシファアのようにアクシオン起こせないだけ。だからルシファア程のすげえ犯罪をしたいつて思ってる！」

「おれも。大人でも躊躇うような事をルシファアは平然とやってのけた。ルシファアは特別なんだよ。腐った人間と国に、ルシファアは打撃を与え、恐怖で支配し、今に至るんだ。ルシファアに会いたい！ 会って、おれ達の仲間になってもらいたい！」
まるでアイドル並の人気のルシファア。

「いや、そんじょそらのアイドル以上かもしれない。
」で、シンバ？ お前はルシファアのどこが好きだ？ やっぱり最初の毒殺で死の実験後の、幼女の肉体を抉って血塗れにした所か？ あれはキリストへの生贄だっつー奴もいるけど、違うね、あれはキリスト……いや、神への挑戦状だ。人間を創造した神へのな。俺なんて、幼女の血塗れ姿を想像しただけで何度も射精しちゃって、神への冒瀆だと思えば思う程、ビンビンになっちゃってさあ」

クツクツクツと喉を鳴らし、笑いながら、そう言って、主犯格の男はシンバを見る。

「ルシファアは人の姿を借りて、この世に降りて来たんだよ。俺達人間がルシファアを崇拜しなくて、どうするんだって話だ。そうだろう？ 神は人間を創造したかもしれねえが、創造しただけで何もしてくれやしねえ。だがルシファアは違う。俺達人間の脆さ、儂さ、そして永遠ではない命の尊さを教えてくれた。だからこそ、穢れなき命を解き放つ為に、肉体を醜く切り裂いて、世界を恐怖で支配する。神を崇拜する愚かな人間共へのメッセージと神への果たし状だ」
全くもって、矛盾ばかりの論を言い出す主犯格に対し、他の2人も納得しているような顔。

ルシファーなど関係なく、勝手に神となる者を偶像化し、崇拜している。

スマートフォンフォンとパトカーのサイレンの音。ビクツとする男達。

今さっき迄、喜々とした表情で話していたのが一変する。

廃墟の外で、何台かのパトカーが停まる音がして、

「あー、犯人に告ぐ。手を上げて、素直に出てくれば、良くはないが、よし。出てこなければ射殺も考えている。ちなみに、この辺一帯は警察でウヨウヨだぞ。そりゃあもお、ウヨウヨだ。逃げ場はない。あるとしても、ない！」

と、マイクを通して、ふざけた台詞。

「な！？ なんだあ！？ ふざけやがって！」

勿論、そう思うだろう、シンバもそう思うと頷く。だが、

「ふざけた台詞の中に本気モードがあった。出てこなければ射殺も考えているってさ。素直に手を上げて、出て行った方がいいかも」と、シンバは提案する。

「はあ！？ バカ言うなよ！ 俺達、捕まったら死刑だろ！ 良くて終身刑だ！」

「そうかもね」

「そうかもねって、お前、今日が始めてだと思っな！？ 俺達はお前もずっと一緒に仲間だったって言うぞ！？」

「言えば？」

「言えばだと！？ そ、そうか、お前、やけに冷静だと思ったら、人質がいるからだな」

主犯格の男はシンバの隣にいる少女を見る。

ビクツとする少女に対し、ナイフを持ち、こっちへ来いと手招き。

シンバは少女の前に立ち、主犯格の男を見て、

「罪を罪で重ねたら、死刑後も、後悔するよ」

そう言った。イラツとした主犯格の男は、

「意味わかんねえ事言ってんじゃねえ！ 別に人質はテメエでもい

「いんだよお！」

と、ナイフを突きつけながら、シンバに近寄り、脅しのつもりか、シンバの横腹をかすめようとして、誤ったか、シンバの腹部にナイフが入った。

「うわあ！！！！！」

何人も女性を殺しておきながら、殺す予定ではないものに手をかけると、物凄い驚きようを見せ、主犯格の男は後退りし、

「ちがっ、ちがう、コイツが勝手に近寄って来たから！　なあ、見たる？　見たよな？」

と、まわりに同意権を求め出す。

シンバは刺された場所を手で押さえ、嗚咽を漏らしながら、前のめりになり、苦しそうに跪いたかと思うと、スクツと立ち上がり、

「うっそー」

と、手の平を見せ、血がついてない事を確認させる。

腹部もなんともない。

男が持っているナイフには血も付いてない。

どういう事だと、男達が拳動不審状態になった所で、

「いやー、お手柄だねー、シンバ君。武器は全部、ニセモノに変えておいたんだね？」

と、マイクを持って現れる男。

さっきのふざけた台詞の声と同じ男だ。

瞬間、シンバも警察の者だと察知した3人は、奇声を上げ、暴れ出した。

だが、あっという間にシンバに返り討ちにされ、手錠がかけられる。何もされていないが、その場にいた少女はガクガクと足を震わせ、座り込んだ。

「すまんね、お嬢さん、勝手ながら劣り捜査に協力してもらって。

いやね、複数いる犯人は全員を捕まえないと事件解決にはならんだよ。その為、内部に侵入し、仲間になり、犯人が利用している場所や武器の数、それから何人いるのか、わかった上で、現行犯逮捕

が望ましいんだ。わかってくれるかね？」

マイクを持ちながら、スピーカー大のまま、そう話す男に、少女はコクコク頷いた。

わかりたくはないが、頷くしかないと言った感じだ。

「くっそー！！！！ 卑怯だぞ、警察がこんな遣り方しているのかよ！」

主犯格の男が手錠をされて、苛立ちで、そう叫ぶ。

他の2人も許せない気持ちを叫びまくるが、ハイハイと頷きながら、シンバは廃墟の外へと3人を連れて出る。

3人をパトカーに乗せようとした所で、

「待って待って。お前、ネット犯罪課だな」

と、男がシンバの腕を掴んだ。

男は警察のカードを見せる。

そのカードには、殺人課と記されている。

「おうよ、ネット犯罪課だ、文句あんのか！」

いい加減、マイクを離れたらいいのに、マイクで、そう言うと、廃墟から出てくる男はシンバの相棒となるジャン・リスカ。

年齢42歳、独身、酒好き、ネット歴ナシのネット犯罪課の刑事。

身長175センチ、体重68キロ、細身の体型と短髪の白髪雑じりの髪と髭、着ている服装は白いシャツとジーンズと、雪駄履き。

「ジャン、お前、何度言ったらわかるんだ、これは殺人課の仕事だろうが！」

そう怒鳴ったのは、殺人課のルディー・アンガス。

年齢44歳、離婚歴ありのバツイチ独身、今迄に殺人鬼を捕まえ、その場で半殺しにしてしまい、何度かクビを言い渡されそうになつた殺人課の刑事。

身長180センチ、体重78キロ、ガツチリ体型と似合わないサラ

サラヘアと、着ている服装は型崩れしていないビシツとしたスーツ。

「殺人課？ ああ、確かに殺人だがな、でもコイツ等はネットで犯行予告や仲間募集、それから被害者の写真を載せたりもしてやがる

「！！！！」

ジャンは、マイクでそう吠えるから、キーンと鳴り響き、皆、耳に不快音を感じる。

「いいか、ジャン、よく聞け。お前達の仕事は、サイバー犯罪対策を行う事だ！」

「犯罪予告はうちの管轄だろうが！」

確かにジャンの言う通り、サイバーテロ、サイバー戦争、サイバーストーリーカー、サイバー暴力、ネットイジメ、ネットオークション詐欺、犯罪予告、これらはネット犯罪課の仕事となり、犯罪予告はネット犯罪課の管轄だ。

「その犯罪予告が書かれたサイトの管理者を割り出し、実際に予告して来た奴の場所を突き止め、その人物を何者なのか調べるのが、お前等の仕事であって、犯人が殺人者であるとハッキリわかった時点で殺人課の仕事となるのが何故わからんのだ！？」

「て言うアレか、お前等殺人課はいいとこ取りか！？」

そう吠えるから、またマイクがキーンと嫌な音を出す。

大体、そのマイクはなんなんだろうか、家庭用カラオケのマイクっぽい。

シンバはルディーに、男3人を素直に引渡し、

「いいじゃないですか、犯人が捕まれば、何の問題もない」
ジャンにそう言った。

「そんなだからネット犯罪課は評判が良くねえんだ、いいか、この前の事件も俺達が活躍したようなもんだぞ、それを殺人課が持つて行きやがって！ シンバ、お前だつて出世したいだろうが！ 町の英雄になりたいだろうが！」

「……………ひとつ、事件が終わったんです、それが大事ですから。それでいいじゃないですか」

「なに物分りいい事言つてやがる！」

ふと、被害者の女の子が、女性の刑事に肩を抱かれ、廃墟から出てくるのが見え、シンバは駆け寄った。

「あの、腹部、大丈夫でしたか？ そんなに強く殴ったつもりはないんですけど」

その声をかけたシンバに、かなり脅えるように少女は後退りし、シンバはかける言葉を失ってしまう。

女の子に触れようとした手も、後退りされた事で、かなり拒否られているのがわかり、シンバは拒絶されている事が伝わり過ぎて、少女同様、何故か怖くなる。

「大丈夫じゃないかしら？ さっき、ちょっとお話を伺ったら、驚いてお腹を押さえたけど、痛みはなかったって言ってたから」

女性の刑事がそう言うので、シンバはコクンと頷いた後、深く頭を下げて、殺人課のパトカーに乗る少女を見送った。

「チツ！ あの被害者だって、俺達が事情聴取できたのによっ！」
ジャンは何が何でも気に入らない様子。

「いいじゃないですか、誰が事情聴取しても同じですよ」
「シンバ、お前は本当に物分り良すぎだぞ！」

ブツクサ言いながら、ジャンはネット犯罪課のパトカーの助手席に乗り、シンバも後ろの座席に乗る。

運転席にはノートパソコンを広げ、カタカタとキーを押しながら、片手でメガネをクイツと上げて、

「今回の事件どうだったの？ サイレント事件と関連ありそう？」
そう問うのはロシユ・バートウ。

年齢27歳、独身、ヘビースモーカー、ネット歴20年と3ヶ月のネット犯罪課の刑事。

身長170センチ、体重63キロ、黒髪に黒い瞳だが両親共アゲルス人、着ている服装は清潔感のあるオフホワイトのTシャツとジーンズ。

「どう思う？ シンバよう」

「ジャンさん、もうマイクは必要ないかと」

「ああ、そう？」

やっとジャンはマイクの電源をオフにする。

「で、どう思うよ？ シンバ？」

「サイレント事件とは関係ないと思います、アイツ等自身、キリスト事件を意識はしてますが、単なる興味ですよ。悪魔崇拜してるような口振りはありますが、本気じゃない。警察に捕まる事に抵抗を見せるくらい、自分が被害者だったら激怒りするタイプ。今迄の被害者も顔を見られたから殺したと言う、自分を守る為の殺人行為っばいですから、自分を危険に陥れるような、自分より恐怖を与えるような人物と関わろうとは思わないと思います。本人達はきつと恐怖を支配できると思ってるでしょうが」

そう話したシンバに、振り向いて、ロシユは、

「ふーん、成る程ね」

とだけ言い、また前を向いて、パソコンをいじり出す。

「おい、早く車出せよ」

「待って下さい、セキュリティホールを改善するよう、被害に合った企業から言われてるんです、これも仕事なんですから。ジャンさんが変わりにやってくれますか？ ジャンさん、できないでしょう？ だから僕がやってるんですよ」

「な、なんだとお！？ セキュリティホールだろ、そんなもん簡単だが、俺より後輩のお前がそういう仕事はやるもんだろっが！」

「ハイハイ、セキュリティホールじゃなくて、ホールね」

ロシユはそう言うと、口の中で、よしと呟き、ノートパソコンを閉め、ハンドルを握る。

前のパトカーが邪魔らしく、少しバックしながら、車を出すのに、ロシユは振り向き、シンバと目が合ったが、直ぐに後ろの窓に目をやり、ハンドルを回す。

「でもさ、キリスト事件に興味湧いて、今回のような事件を起こすバカ共がいるけど、当の本人のルシファーはそういうの、どう思ってるのかな？」

運転をしながら、そう言って、何故か振り向いて迄、シンバに問うロシユ。

「そりやお前、アレだろ、俺ってカツコイイって思ってたんだろ
何故かジャンが答える。

「俺ってカツコイイ？ 本当に？」

半笑いで聞き返すロシユに、

「そりやそうだろう、あんなイカれた事件起こすガキだ、イカれた
考えの持ち主だからよお。そっぴやあ、ルシファーって何歳になる
んだ？ 白人に水色の目だったっけ？ 今頃どこで何してるんだろ
うなあ？ 今更、少年課の連中もわからんだろうな、寧ろ、ルシフ
アーは直ぐに施設送りになったんだっけかな、施設で15年の刑を
終え、この世に出てきて、まともに生きてたら、被害者は報われね
えだろうなあ」

流れる景色を眺めながら、そう話す。

「ははは、例えば僕がルシファーだったらどうします？ この国で
は犯罪歴があっても刑事になれますからねえ、有り得なくはないで
しょー」

ロシユの、その質問に笑いで返し、

「そっくりそのまま、お前に質問してやるよ」

と、ジャンは言う。

「ジャンさん無理でしょー、年齢合わな過ぎですよ」

と、ロシユも笑いで返す。

まさか、キリスト事件の事で、こうして笑う者がいるなんて、思い
もしなかったと、シンバは後ろの座席で、2人の後頭部を見ながら、
ぼんやりとしている。

ネット犯罪が増える中、悪質な事件も多く、そして猟奇的な事件に
なると、必ず引き合いのように出されるキリスト事件。

20年過ぎた今も尚、色褪せない事件。

悪魔崇拜として立ち上がったホームページはルシファーのプロフィ
ール迄、載っている。

生年月日や星座、血液型だけでなく、身長、体重、視力、知能指数、
家族構成、出身地、病歴や持病、口癖など。

そのホームページに入る前に、エンター画面の前に流れ出る文字。

？ここはルシファー様を崇めるサイト。ルシファー様を中傷する者は罰を下す。ルシファー様を殺人者と結びつけ、ここに来た者は立ち去られよ。ルシファー様の魅力そのものに魅せられた者より、我がサイトへようこそ？

そのサイトでは、沢山の過去ログも見れる。

ルシファーが捕まった日だからと大騒ぎのスレもあれば、ルシファーの誕生日だからと祝いメッセージのようなスレもあり、事件の謎に迫るといふスレや簡単にルシファーについて語ろうというスレもある。

人は危険を嫌う癖に、危険を遠くから眺めている事が大好きな生き物である。

悪魔なんて、本当はどこにも存在せず、ルシファーが人間である事を理解し、そして人間は死ぬ事ができる生き物だとわかった上で、崇拜する。

そう、もしも、悪魔の生贄として選ばれたとしても、正当防衛とでも言い、ルシファーを殺す事は誰にでも出来る。

ルシファーは悪魔ではなく、人間なのだから。

つまり、ルシファーは恐怖なんて何も生んでいない。

本当は誰からも崇拜などされていない。

生んだのは話題性だけ。

3・ルシファーと呼ばれた少年

「そうそう、面白いサイト見つけたんだよ」

シグナルで停まった時に、ロシユはそう言って、シンバにノートパソコンを開いて、あるサイトを画面に映して渡した。

わざわざ助手席に座るジャンではなく、後部座席に座るシンバに見せる辺り、シンバの意見が聞きたいのか、それとも、一人で座るシンバの退屈さを気遣っての事か。

実際、ぼんやりしていたシンバは退屈そうに見える。

「なんだ？ 何のサイトだ？」

ジャンが興味有り気に尋ねる。

「ルシファーの深層心理について語っているんですけどね、いやあ、何気に詳しく事細かく書いてあるんですよ、当時の事件の事なんかを。新聞や雑誌に載った記事をまとめて引用してあるんでしょうけど、ルシファーの家庭背景や性の目覚め、知能指数なども含めた上で、ルシファーの深層心理を解説するって言うんですよ」

「ほー」

なんだそんなサイトかとジャンが、どうでも良さそうに返事をする。確かにそんなサイト、沢山ある。

今更、何故、こんなサイトを見せたいのかロシユの心理がわからない。

「そのサイトの掲示板はね、ある意味、犯行予告だらけなんですよ。例えば？ 私も幼い頃ですが、誤って、猫を殺した事があります、特に興奮などしませんし、死について考えた事もなかったです。もう一度、何かを殺してみれば、ルシファーのように死に興味を持ちたり、興奮したりするのでしょうか？ とかね」

「ほー」

「？ 小さい頃、よくカエルを空気弾で撃って遊んでました。内蔵破裂したカエルがおかしくて笑いました。これってルシファーと同じ

気持ちって事になるのかなあ？　だとしたら人を殺してみる事も可能かなあ？？とか　」

「へー」

「？どうして昆虫を殺しても罪にならないのでしょうか、昆虫なら毎日殺しても裁かれぬ。つまりルシファーは虫を殺すように人を殺しただけ。ルシファーに罪はなく、罪なのは死を理解しない奴等だからこそ、世の人間達に死を理解させる為に、死者を今夜辺り大量に出すってのはどうだろう？？とか　」

「ていうか、お前、全部読んで、暗記したのか？」

「まさか。ちょこちょこつと見たものが頭に入っただけだよ。でもある意味、犯行予告でしょ？」

「その程度じゃあ、犯行予告とまで行かんだろう、無責任な発言だなあと思うがな」

そう言ったジャンに、ロシユは唇を尖らせ、

「折角、仕事になるかなあと思つたのになあ」

と、吸っていい？と煙草を取り出し、ジャンとシンバを見る。

サイトを目の前に硬直しているシンバに、

「シンバ？　吸っていい？」

と、声に出して聞き、ハツとするシンバは、ロシユに頷く。

窓を開け、ハンドルを軽快にまわしながら、煙草を啜え、ロシユは、再び振り向いてシンバを見る。

「どうかした？」

「え？」

「顔色悪いよ。そのサイト、異様に気になる？」

「ああ、いや、車酔い」

「マジで！？　シヨックだなあ、運転うまいって言われるんだけどなあ」

と、ロシユは白い煙をフーツと出し、そう言って笑う。

警察署に着き、本当に具合が悪いのだろう、シンバは自分のデスクの上で肘を付き、頭を抱え込むようにして額を押さえている。

「おい、シンバ、今日、飲みに行くぞ」

ジャンがそう言うので、シンバは顔を上げた。

「あ、すいません、今日は叔父と会う約束があった」

「またかよ！ 先週も会ったろう!？」

そう言ったジャンに、

「先週じゃなく、先月ね。月1で来るね、その叔父さん」

と、ロシユは、シンバの向かい合った席で、パソコンのキーを打ちながら言う。

「たまには俺に付き合え！」

「たまに？ いつもでしょ」

またもロシユが、ジャンの台詞を言い直す。

「すいません、叔父が待つてるから」

「よおし、わかった！ じゃあ、こうしよう、その叔父とやらも一緒に連れて来い。みんなで飲めばいい！」

勝手に話を進めるジャン。

「いや、でも、叔父は飲めませんから」

「飲めねえ？ 大歓迎だ！」

何がだろう、こっちは歓迎してないのにと、シンバは困った顔。

「いいじゃないの、付き合っただけだよ。僕も行くからさ」

ロシユがそう言うのは珍しい。

大体はジャンの奢りだと言っても行かないのがロシユだ。

「よし、決まりだ。メリツサの店にいるからよ、叔父連れて来いよ、いいな、シンバ？」

早番のジャンとロシユ、それからシンバは、署を後にするが、この後、飲みがある事を考えると、疲れたシンバは結構辛い。

交差点を駆け抜け、オープンカフェへ入り、本を黙読している男性に近寄り、

「遅くなつてごめん」

と、声をかけた。男性は優しい笑みを浮かべ、

「今来たところだよ」

と、半分以上もページが捲られている本を閉じる。

シンバは男性と向かい合わせに座る。

「今日も仕事だったんだろう？ 警察ってのは危険と背中合わせだ。今日もキミが無事で私は嬉しいよ」

そう言つて、顔の皺が優しい笑みを作り出し、シンバを見つめるのは、ソーシャルワーカーのレーチュル・マシユリー。

年齢56歳、妻とは死別、子供は一人暮らし中で、独身同然の暮らしをしている。

身長168センチ、体重60キロ、ポロシャツとサテンのズボンを纏っているが、彼のオーラそのものが優しい雰囲気醸し出していて、柔らかいベールを纏っているかのよう。

「コーヒーを彼にも」

ウェイトレスにそう言つて、シンバの分もコーヒーを頼み、レーチュルは優しい瞳で、シンバを見つめる。

「今日はちよつと疲れたよ」

「おや、珍しい」

「最近、よく疲れる」

「世の中に慣れて来たな」

「そうなのかな」

「ああ、緊張の糸が切れるかもしれんな。緊張感は大事だ、初心を忘れるな」

「うん。なんかね、最近、思うんだ。どうして、みんな、ルーセンの事を知つたように言うのかなつて。勝手にルーセンを神に近い存在かのように思い込むし、更にルーセンの深層心理なんて、ルーセンの生き方を知つたからつて知れるようなもんじゃないと思うんだけど。それに生き方だつて、そうじゃないって思う事ばかりが世に出てて、うん、確かに生き方で心理を理解する事もあるだろうけど、その本質つて、マニュアルに過ぎないし、マニュアルの型に嵌るくらい簡単な思考なんて、誰も持ち合わせてない。なのに、人は、皆、ルーセンを知つたように言う。ボクだつて」

溜まっていたものを吐き出すように、シンバはそう言った後、言葉を飲み込み、

「オレだって、ルーセンの事、何にも知らないのに」
「そう言い直し、言葉を続けた。」

ずっと、にこやかな笑顔で、レーチュルはシンバの話を聞いている。

「だってさ、もう20年だよ」

「ああ、その通りだ、シンバ」

「……」

「もう20年だ。それに、キミはルーセン・C・フアークレイじゃない。シンバ・フォートだ。5年前を思い出してごらん。8歳だったキミは23歳になって、世に出てきたね。本当はアグルスじゃなく、違う国でも良かった、キミが存在できて、キミが生きていける場所。だけど、キミはアグルスから出て行く事をしなかった。あの事件から一番近い場所で、生きていく事を決めた。何の為に？ 覚えてるか？ キミがあの時、私に言った事を」
「……覚えてるよ。？ボクは警察署で働きたい？そう言ったんだ」

「そうだよ、キミはそう言った。理由を聞いたら、？償いたい？そう答えた。あの時から、キミは、ルーセンではなく、ちゃんとシンバとして存在している。？理由なんてない？と答えるルーセンではなく、ちゃんと理由を持ち、明日へと向かって生きるキミが存在している。そうだろうか？」

それはどうだろうとシンバは黙り込む。

コーヒーがテーブルに置かれ、ウェイトレスが立ち去った後も沈黙は続く。

「シンバ？」

「マシユー。聞いてくれる？」

「勿論」

「マシユーにだけ言うよ。オレは精神科医の心理テストのコツを全て理解している」

「・・・・・・・・」

「医師が求める答えを、オレは頭の中で用意し、口に出すだけ。誰もオレの深層心理には触れてない。本当の事なんて、誰も知らない」

「・・・・・・・・」

「オレは医師達が社会復帰を許すよう、そうして来ただけ。本当の事なんて、何もしてないし、何も言っていない。これからもオレはそうして行かなければならない。誰にも自分の正体を明かせずに、偽って生きていく。できるだけ得意な事でもないし、したい訳でもない。寧ろ、オレは」

「シンバ」

「レーチュルはテーブルの上で小刻みに震えるシンバの手を握り、

「偽りじゃない」

そう言った。

「シンバ、キミは刑事としての資格を得て、町を守っているシンバ・フォートだろう。考えすぎだよ、キミが社会復帰できたのは、キミが医師達をそう仕向けた訳じゃない。ルーセンなんて少年は、私は知らないよ。確かに有名だが、私は興味がない。シンバ、キミもだろう？ いいじゃないか、世の中、彼に興味がある者だけが、彼を語れば。彼がどんな人物だったか？ 彼の深層心理を暴いた所で、キミには関係のない事だ」

「だけど！」

「いいかい、シンバ。ルーセンを知りたがる者は世界中にいるだろう。簡単にルーセンを語り、ルーセンを感じようとす。だが、その誰もがルーセンなど知らない。ルーセンを褒め称える者も、ルーセンを貶す者も、所詮、ルーセンを何も知らずに言っているだけだ。キミもその1人だよ、シンバ」

「オレも？」

「ああ、ルーセンを知らない者の1人。だけどルーセンの事を一番感じてしまう。キミはその運命を選んだんだ。この町に残った時にね。だからキミはそれを背負わなければならない。とても重く押し

掛かるチカラに、キミは正義で対抗するしかない。それがキミの今の職業なのだろう?」

シンバはコーヒーにミルクを入れ、コーヒーのブラックの色とミルクのホワイトの色が混ざり合うのを見ながら、

「……………うん、そうだね」

そう言った。そして、直ぐに笑顔で顔を上げ、

「ジャンがマシューも一緒に飲みに来いって」

そう言った。

「それは今日かい?」

「うん」

「急なお誘いだなあ」

「ボクも、あ、いや、オレも今日は駄目だって言ったんだけどね、どうする?」

「ああ、シンバの仕事仲間だろう? 話もしたいと思っていたし、行くよ」

「ホント? メリッサの所だって言ってたから、ここからそう遠くないよ」

「メリッサ?」

「うん、ジャンが行く店はメリッサの店と決まってるんだ。あ、メリッサって言うのはオカマのオバサン」

と、笑うシンバを見て、レーチュルも笑う。

そのシンバの笑顔の影には、ルーセン・C・ファークレイが存在する。

ルーセン・C・ファークレイだった頃の経歴は全部捨て、名前も生月日も変えて、この世に出たシンバ・フォート。

全くの別人になる為に、銀髪に近かった綺麗な髪は赤茶色に染め、瞳もブラウンのカラーコンタクトをして、毎日を過ごしている。

そうする事で、世間の目から逃れ、ひっそりと生きていく事を、シンバは警察と言う正義の組織に入り、自ら壊しているようなものだ。嫌でもキリスト事件は耳に入る職業だし、辛くてもルーセンの名を

見てしまう事もある。

ましてやネット犯罪課など、ネットを通じる事により、どうしても目に入り、耳に入る。

「シンバ？」

その声に顔を上げると、ロシユがいる。

「あ、シンバの叔父？」

そう聞かれ、シンバは焦るように頷くと、それをフォローするように、

「どうも。レーチュル・マシユリーです、マシユーと呼んで下さい」

と、落ち着いた優しい笑みを浮かべ、レーチュルは手を差し出した。

その手をロシユは握り、

「シンバの同僚のロシユ・バートウです」

軽く挨拶を交わす。

「メリツサの店に行かなかったの？」

ここにいるロシユを不思議に思い、シンバが尋ねた。

「いや、まだ時間あるだろ？ ジャンさんと飲んでると、ふざけた

話が長くて面倒だからさ、もう少ししてから行こうと思って」

言いながら、隣のテーブルに荷物を置き、座るので、

「こちらに一緒にどうぞ」

と、レーチュルが誘うが、

「いえ、仕事がありますので」

と、パソコンを広げるロシユ。

「仕事って？」

レーチュルの手前、仕事をさぼったと思われると嫌なので、シンバは尋ねる。

「いや、ほら、キリスト事件についてね」

「………仕事じゃないじゃん、それ、ロシユの興味だろ？」

「仕事だよ」

「なんで？ だって、あの事件は解決してるよ」

「解決？ どこが？」

「え？ だって、犯人は捕まってるし……」

「確かに犯人は捕まって、世にも晒されて、悪魔となり、ルシファーと名付けられている。でも謎ばかりが残っている」

「謎？」

「ルシファーは最初の被害者を毒殺した。その毒薬は知らない人からもらったと供述している。だが、その知らない人の顔も格好も、まるで覚えちゃいない。あの頭脳明晰のルシファーがだ。二番目の被害者と三番目の被害者の肉体はズタボロで、無残な姿で発見された。何故、そんな酷い殺害方法で殺したのか、ルシファーは理由なんてないと供述している。只、そうしたかった。そうしたかったのなら、二番目の被害者だけで充分だ、どうして三番目の被害者も同じように殺している？ 他の殺し方を試してもいい筈だ、最初の被害者が毒殺で、次は無残な殺害で、その次は赤ん坊だったのだから、水に沈めて水死もできる筈。殺す事に興味がないなら誰も殺されない。だが、殺されているんだ、そうしたいと思う方法で」

「……」

「それだけじゃない。この事件は謎だらけだ。最初の被害者の死亡推定時刻を考えても、午前中の内に殺害されている。なのにルシファーは午後、教会で祈りを捧げている。それを神父も目撃している。だとしたら、被害者の死体はどこへ隠しておけた？ 家族から虐待に合っていたルシファーの家は無理だろう、ルシファーが自由にできるスペースなんてなかった筈。学校だって友達さえ、いたのか、いなかったのか、わからないのに、死体を隠す場所なんて、ルシファーにはなかった筈。だが、死体が発見されたのは次の日の朝。約丸一日、死体をどこへ隠しておいたのだろう」

そう言いながら、ロシユはカフェオレを注文し、パソコン画面を見ながら、キーをリズム良く打っている。

「最大のミステリーは犯行に使用した凶器。二番目、三番目の被害者を殺害した武器は鉞。ルシファーの家の倉庫から、凶器となる鉞も見つかっていて、ルシファーの供述通りだ。肉を鉞で無理矢理に

抉った感じも、叩いて押し潰した感じも、鉈のあらゆる場所で行ったと見られる。だが、もう一つの凶器は出てきていない」

「え？ もう一つの凶器？」

「被害者の手の平に描かれた十字の文字だよ。鉈では、文字や絵を肉に刻むなんて事はできない。ナイフを使用したらしいが、未だ、そのナイフは出てきていない」

「・・・・・・・・・・」

「更に謎は深まる。手の平の十字架。十の文字をナイフで刻んだらしいが、ルシファーは、それを知らないと言った後に、再び、問うと、それはそうしかかったからと答えている。どうして最初は知らないと言ったのだろうか、そして何故、そうしかかったからと思いついたように答えたのだろうか」

「・・・・・・・・・・」

「ルシファーは被害者の手の平に傷がある事を知らなかったんじゃないだろうか。だけど取り調べの最中、被害者の手の平に傷がある事が本当の事かもしれないと思った。それは自分がつけた傷ではなく、何らかの方法で傷が出来た事だったから、ルシファーは最初に知らないと言った。だとしたら、何故、何らかの方法で傷が出来た事を言わず、自分がつけたかのように、そうしかかったと答えたのだろうか」

「・・・・・・・・・・」

無言のシンバをチラッと見て、ロシユはメガネを中指でクイツと上げ、煙草を手に取り、口に啜えたが、禁煙席かと、直ぐに煙草を箱の中に戻す。

「シンバはどう思う？」

「・・・・・・・・・・精神病の少年だろうか？ 言う事が違うのはしょうがない」

「精神病？ そうかな？ そうは思わないけど。だって、ルシファ―は二番目、三番目の被害者に対しては事細かく、そうしかかったと言っただけの、犯行内容を詳しく話している。証拠品と照らし合わ

せても、ルシファアの供述は正しい。そんな彼が精神病？ それに彼は医師からも正常だと診断され、今は世に出て来ている」

「……………」

急に黙り込むシンバに、ロシユはハツとして、レーチュルを見た。にこやかな表情を壊さず、黙ってコーヒーを啜るレーチュル。

「ああ、スイマセン、シンバ、叔父さんと話して？ 僕は邪魔だったね」

「あ、いや、あの、ロシユ、その、深く考えすぎなんじゃないかって思うよ。もうその事件は終わったんだよ。今はサイレント事件の方を重点に置こうよ」

「確かに全く犯人がわからないサイレント事件の方が重大だよな、未だ被害者は出てる訳だし。だけど殺人課担当の事件だから情報が僕達に下りて来ないのも事実。サイレント事件を解決できれば、僕達の課も出世コースになるかもしれないけど、実際、出世に興味あるかって聞かれるとね、僕は余り……………」

「でもジャンさんはサイレント事件を解決したがってるよね。ボツ………… オレもサイレント事件は解決したい。キリスト事件後、ルシファアの真似とまで言われ、殺人を繰り返す、その犯人を捕まえて、全てを終わりにしたい」

「全て？」

聞き返すロシユに、シンバは頷き、

「もう終わったんだ、キリスト事件は。だから、それを真似る事件を全て終わらせたい」

そう言った。

ロシユはカフェオレを一口飲むと、フーンと頷き、

「終わらないと思うけどね」

などと呟く。そんなロシユを見て、シンバは、

「終わるよ！」

ムキになるように言ったので、ずっと黙っていたレーチュルが、
「なんだか仕事の話なのに、私がここにいていいのかなあ？」

と、にこやかに聞いた。

「ああ、いや、僕の方こそ！ これじゃあ同席と同じだ。スイマゼン」

「いやいや、お若いのに、仕事熱心で素晴らしい刑事さんだと思って拝見してました。所で、シンバは仕事場ではどうでしょう？ ちやんとやってますか？」

「ええ、とても優秀です、年下の僕が言うのも何ですが、一応、僕の方が先輩なんですよ、職場では。でもシンバは凄いです、現場に踏み込む勇気もあるし、死体を見ても驚きもなく分析も早い。そう、僕なんかより、うんと頭の回転が速い！ 特にキリストの聖書を引用したり、謎かけのメッセージを残す犯人に対しての答えを導くのが早い。直ぐに聖書の何ページ目の何行目の言葉だとか言い出して、その意味さえ理解している。凄いです。それだけじゃなく運動神経が並外れてて、まるで軍か、少年院にでもいたんじゃないかって思う程！ 殺人課の刑事達がシンバを引き抜きたいって話もある位！」

「シンバが？」

と、内心はどうだかわからないが、レーチュルはクスクス笑いながら、問う。

アグルスの少年院、または犯罪を犯した者が入る施設では、毎日、疲れ果てる迄、体を動かし続けさせられる。

性欲防止の為という意味もあるし、辛い試練を乗り越えるという意味もある。

だが、それもどうなのかと言う意見が多い。

刑を終え、世に出てくる者が、体力的に一般人以上の能力を身につける事は、やはり、どんなに医師達から正常な精神だと許可が下りても、恐ろしい。

「だからシンバは現場に乗り込む担当だってジャンさんが。駒扱いかよって思うし、普段からジャンさんはふざけてるけど、若い頃はシンバ並みに動いてたらしいからね。実際、キャリアあるし、凄い人ではあるんだよね、あの人。シンバは、うちの課でも、まだルー

キーだよ、でもジャンさんは、駒扱いとは言え、ルーキーのシンバを相棒として認てんだから、ホント、シンバは凄いのよ」

「ロ、ロシユ………褒めすぎていつか、言いすぎだから」

「何言ってるの、シンバ。全部本当の事！」

「いや、嘘だよ、信じないで」

と、レーチュルに言うシンバに、

「変な奴だな、普通は身内の前では、もっと褒めるだろ？」

そう言ってる、ロシユは、カフェオレをゴクリと飲み、

「シンバの悪い所はネガティブ思考なんですよ。何か昔、あったんですか？ ネガティブになるような出来事が」

と、レーチュルを見る。

「何もないよ！！！！」

またムキになって大きな声を出すシンバに、ロシユは驚いた顔で、シンバを見る。

「確かにシンバはネガティブだ」

と、レーチュルが言う。そして、

「特にネガティブになるような生い立ちでもないとは思っただけど、両親を亡くしてますし、だからと言って、両親を亡くしたのが理由とも言い切れない。私もシンバのネガティブさには困ってますよ、幾ら言っても、悪い方向へと思考が行ってしまうみたいで」

そう話した。

ロシユも頷きながら、

「その性格さえなければ、シンバは完璧ですよ」

と、笑う。

「でもロシユさん」

「はい？」

「アナタも確かに言いすぎる所がある」

「僕がですか？」

「はい、だってシンバは完璧じゃない。完璧な人間なんていないの

だから」

レーチュルにそう言われ、「尤もだとロシユは頷く。

「ロシユさんは、ご結婚は？」

「してません」

「そうですか、仕事の方が楽しいですか？」

「いや、そう言う訳では。只、まだ結婚は」

「と言う事はお相手はいると言う事ですか」

「まあ、そうですね、1人や2人……おっと、秘密ですよ」と、ロシユはメガネをクイツと中指で上げ、軽いジョークで、その場を和ます。

「シンバはどうなんだい？」

突然、レーチュルがシンバに話を振るので、シンバはビックリしてテーブルの脚に足をぶつけ、揺れたテーブルのせいで、少しコーヒーがこぼれる。

「どうって、何が？」

「だから好きな女性とかいないのかい？ どうも照れくさいのか、こういう話をしたからなくてね。私としては、そろそろ好きな相手くらい、いてほしいものなんです」

そう言って、いつもの優しい笑顔を見せるレーチュル。

「うちの職場は男が多いし、女性がいたとしても、既に結婚してたり、相手がいたり、なかなかフリーの女性はいませんね。それにいつもの日常を過ごしてるだけでは、映画みたいなハプニング的な出会いなんてありませんからねえ。そうだ、誰か紹介してやるうか？ 今度、飲み会でも開いてさ。勿論、ジャンさんには内緒で」

「ああ、それがいい！ 是非、誘ってやって下さい」

「ちょ、ちょっと待って！ いららないから！！！！」

シンバは焦って、急いで、進む話にブレーキをかける。

「いらないって、まさか、お前、ゲイとか……」

「ちがうよ、ロシユ！ そういうんじゃない！ まだ女性とは、その、うまく接する自信がない。だから、その、とにかく無理なん

だ」

「自信ないって、お前、その年齢で、まさか？」

眉間に皺を寄せ、変なモノを見るような目を向けるロシユに、シンバは、

「ま、まさか！ そんな訳ないだろう！ まさかだよ、まさか！」
と、慌てまくるので、余計に変になる。

一瞬にして、空気が変わるのを感じて、シンバはフウツと溜息を吐き、

「そудだよ、まだ、女性とは何もした事がない」

正直にそう言つと、俯いた。だが、直ぐに顔を上げ、

「変かな？ 変なのかな？」

そう聞いた。レーチュルは首を振り、

「変じゃないさ。ゆっくりでいい。シンバのペースでいい。私が悪かったね、好きな女性でもいれば、ネガティブ思考も変わるかと思つたんだよ」

優しい笑みで、そう言つので、シンバはホツと安堵の吐息を吐く。

「正直、僕は変だと思つよ」

パソコン画面を見ながら、ロシユがそう言つて、そして、シンバを見る。

シンバもロシユを見る。

「シンバは結構美形だし、一応、正義の名の下にいる職業だし、ま、危険度と自由度を考えたら、女の子にはモテないけどね。だけど、結婚は別にして、軽く付き合える女性はいてもいいよ。モテた事くらいあるだろう？」

「ないよ」

「今迄で一度も？」

「ないよ」

「不思議だな、比べる対象が違うけど、正義のシンバはモテないのに、悪のルシファーはファンクラブまである程」

と、パソコン画面をシンバに向け、ルシファーのファンが集うログ

を見せる。

そこには、ルシファーと付き合いたい、デートしたい、抱いてもらいたいなどと書かれている。

「もっと不思議なのがさあ、ルシファーの事を尊敬するだの、ファンの言う連中って、自分はルシファーに嫌われないと思ってるのかなあ？ 僕は不思議でならないよ、だって、ルシファーにだって選ぶ権利あると思わない？ ないの？ もうそこが見下してるよね」

「でもさ、僕は思うんだよ、正義と悪なら、絶対に悪の方が強いって」

左手で頬杖を付き、ロシユはぼんやりとした目で、そう言った。

そのロシユの横顔が、何故か、シンバの中で、ハニエルを思い出させ、それ以上、ロシユを見ている事ができなくて、直ぐに顔を背けた。

「そんな事ないさ、正義は必ず勝つのだろうか？ 悪は正義の前では無力だ」

そう言ったレーチュルに、

「そうかな！？」

と、ロシユが反論。

「もともとサタンになる前、ルシファーは最高位の天使だったと言いますよね。嘗ては神が最も愛した天使だった。だけど神に背き、ルシファーは地に墮とされる。その後、サタンと呼ばれたルシファーは、ずっとサタンでいる。正義には戻らないみたいだ。なんでだろう？ どんなに正義を貫いても、神に背いた、その1つの罪が、彼を悪にする。つまり善だったルシファーは悪のサタンには勝てないんだ。だからルシファーは今も尚、サタンと呼ばれている」

シンと静まり返り、ロシユはフツと笑みを零すと、

「架空の話にテンション上げすぎですね」

そう言っつて、パソコンを閉じた。

シンバは冷めたコーヒをゴクリと一口飲みながら、ロシユの話を

自分に置き換えていた。

サタンと呼ばれたルシファーは、ずっとサタンでいる。

ルシファーと呼ばれた少年は、ずっとルシファーでいる。

善だったルシファーは悪のサタンには勝てないんだ。

善のシンバは悪のルシファーには勝てないんだ。

ルシファーは今も尚、サタンと呼ばれている。

少年は今も尚、ルシファーと呼ばれている。

？ねえ、ルーセン、私ね、ルーセンに聞いてもらいたい事があるの？

あの時の彼女が、ハニエルがシンバの脳裏に浮かぶ。

？あのね、ルーセンと私だけの秘密だよ？

そう言つて、はにかむ彼女が、大好きで、ボクはルーセンである事を忘れられない。

だけど、もうルーセンはいないんだ。

ルシファーと呼ばれた少年は、消えたんだ。

世の中には消えてなくても、オレの中にはいない。

オレはシンバだ。

シンバ・フォート。

それがオレの名前。

4・初めての感情

そろそろ行くこうと腕時計を見て、ロシユが言うので、メリッサの店へ行く。

店に着くと、大きなケーキを用意して、ジャンとメリッサと、他の顔見知りの刑事達がシンバを迎えた。

クラッカーが鳴り、何かと、シンバはビックリするが、背後から、「誕生日だろ？」

と、ロシユが言うので、シンバはレーチュルと顔を見合わせる。

「29歳の蝋燭だからな、ケーキの上で火事だ、火事！」

と、笑うジャンに、

「なんでもっと大きなケーキ用意しないんですか。蝋燭だって、29本さす必要ないでしょう、真ん中に2本、まわりに9本でいいんですよ。だから僕が時間稼ぎするより、ジャンさんが時間稼ぎした方が良かったんですよ」

と、ロシユが文句をつける。

どうやら、ロシユがカフェに来たのはケーキを用意する為の時間稼ぎだったようだ。

「あ、あの……誕生日なの……？ オレ……
……？」

本当の誕生日は過ぎている。

だから実を言えば、とつくに29歳になっている。

だが、生月日を変えた為、それが今日だったか、すっかり忘れている。

「シンバの履歴には今日が生まれた日になってるが？」

ロシユがそう言うので、シンバは、

「あ、そう？ そうか、ははは……」

と、笑って誤魔化す。

「そ、そうだよ、そうだ、お前の誕生日じゃないか、シンバ」

レーチュルも気の利いたフォローを入れる。

「さあさ、シンバちゃん、今日はたーくさん飲んで食べて行ってね、ジャンが奢るらしいから。20代最後の1年は、可愛い彼女つくらなきゃね！」

メリッサが逞しい体をすりつけるように、シンバに近寄って来て、そう言うので、シンバは少し逃げ腰で、笑顔で頷く。

沢山の仲間に囲まれ、笑顔で過ごすシンバを見て、レーチュルは安心する。

シンバはちゃんと社会に出て、ちゃんと人生を歩んでいる。

過去の影に苦しむのは、仕方のない事で、寧ろ、苦しまない方が異常だ。

昔は忘れるとは言えない。

ルーセンだった頃は消せとは言ってはいけない。

それ程の重い罪だ。

だが、そう言わなければならぬ。

忘れられないし、消せないものを、忘れるな、消すなどとは言えないからだ。

だが、シンバは忘れてないし、消してもないが、こうして笑顔で、人と人の繋がりを持ち、人の中に溶け込んでいる。

シンバはもう大丈夫だ。

レーチュルはそう確信した。

メリッサの店を出て、シンバとレーチュルは帰り道を歩いていた。

レーチュルはバスに乗る為、シンバはバス停まで送る。

「まさか29歳の誕生日だったとはな。そうか、5年だとばかり思っていたが、もう6年になったんだな、シンバ・フォートとして、キミがこの世に生まれてから」

「うん」

「……………シンバ、仕事、大変そうだなあ」

「え？」

「シンバは、キリスト事件を忘れられない環境にいる。ほら、メガ

ネの……」

「ロシユ？」

「そう、ロシユさんはとてもキリスト事件に興味あるようだし、えつと、雪駄の……」

「ジャン？」

「そう、ジャンさんは、そのキリスト事件の模倣だとか言う事件……」

「サイレント事件？」

「そう、サイレント事件を解決したがってるらしいし、シンバには辛い環境なんじゃないかと思うんだが」

「うん、でもオレもサイレント事件は解決したいし、しなきゃならないし、大変なのは、オレだけじゃないし」

そう言ったシンバに、只、只、頷いて、レーチュルは微笑む。

「そうだな、シンバが選んだ道だからな。私は今迄、犯罪を犯した少年達を社会復帰させる為に動いてきた。初めてだったよ、警察署で働きたいと言って来た奴は。最初は無理だと思っていたんだ、だが、短期間で資格も取り、面接まで通り、驚いたよ。本当に初めてなんだよ、偽りの経歴をホンモノにした奴は」

「マシユ……酔ってるの……？」

なんだか、とても懐かしいような顔で話すレーチュルに、シンバは疑問を感じる。

「酔ってないさ。でも聞いてくれ、シンバ。お前はもうルーセンじゃない。本当に私はそう思う。例えルーセンの影に脅えても、ルーセンである事が消えなくても、シンバは負けない。何故なら、キミはルーセンと向き合おうとしている。逃げる事もできたろうに、逃げないで、その罪を背負い、生きている。だからシンバは負けない。絶対に負けない。負けないでくれ。これからキミは長い人生を生きるんだ」

そう言うと、突然、シンバを抱きしめ、そして軽いハグをすると、向こうから来るバスに、レーチュルは駆け出した。

「今日はありがとと、皆さんに伝えといてくれ。楽しかった」

「マシユー、次は来月の終わりでもいいの？」

「次はない」

「え？」

「もう私に会う必要はない」

「な、なんで！？ 無理だよ、ボクはまだ」

「シンバ、お前はシンバだ！」

「あ、いや、その、オレはまだマシユーが必要だから」

「大丈夫だ」

そう言うとレーチュルはバスに飛び乗った。

「待って、マシユー！」

バスを追いかけるシンバに、レーチュルは窓を開け、

「シンバ、次に会う時は私の職業関係ナシに会おう。キミの仲間達のように、私も只の友人としてね、キミに会いたい」

そう言った。シンバは足を止め、只、その場に立ったまま、行ってしまうバスを見送る。

「………オレの………仲間………？」

レーチュルが言った台詞が、シンバの胸の奥の方まで届き、だんだんと温かいものが込み上げてきて、自然に顔が微笑み出す。

こんな気持ちになったのは、シンバとしては初めて。

いいのかな、オレ………ここにおいても。

少しづつかもしれない、本当にちよつとずつ。

シンバはシンバとしての居場所を見つけている。

6年間、苦しくて長かった日々。

やっとシンバとしての時間が、ちゃんと動き出そうとしていた。

それはレーチュルのおかげであると、シンバは心から感謝している。

次の日の朝、いつも通りに出勤すると、遅番の者も来ていて、全員集合でネット犯罪課の部屋にいた事で、シンバはしまったと思い、急いで携帯を確認する。

何か事件があり、早く来いと連絡があつたのだろうが、気付かなかつたのだと思つたからだ。だが、携帯には着信1つない。

あれ？

おかしいな？

「シンバ、ちよつと来い」

ジャンと呼ばれ、急いで行くと、

「昨夜サイレント事件が起きた」

そう言われ、シンバは再び携帯を見てしまう。

「お前には連絡してない」

「え？ なんで？」

「被害者はレーチュル・マシュリー、56歳」

ジャンが何を言っているのか、シンバには、全くわからなかった。

そして、ジャンが言っている事の理解をした時、シンバは、いや、ルーセンとしても、初めての感情が体の中から湧いて来るのを感じた。

放心状態で、シンバは、その感情がなんなのか、冷静に考えている。怒り、悲しみ、憎しみ、そういうものかもしれないが、違つかもしれない。

簡単に言葉になんてできない感情。

シンバの唇が微かに動く。

「復讐してはならない……わたしは言うておく。悪人に手向かつてはならない。誰かが右の頬を打つなら、左の頬も出しなさい。敵を愛しなさい……わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」

「神よ……ボクは……どうしたらいいですか……」

その台詞は、もうシンバではなかった。

「うわあああああああああああああああ……!!!!」

頭を抱え込むように押さえ、シンバは、わからない感情に、悲痛を
叫ぶしかなかった。

5・現実逃避

サイレント事件。

喉を切り裂き、声が出なくなった被害者を鉈で鬪り殺した後、被害者の背中に針金で細工した白い鳩の羽を刺して、手の平に十字の文字を描く。

被害者は老若男女、これといった共通点は見つからず、無差別である。

キリスト事件後の事件であり、未だ未解決のまま、犯人も捕まらず、被害者は続出している。丸1年、被害者が出なかった時期もあれば、数日後に被害者が出る事もあり、犯人は心に不規則な波があると思われるが、これと言って、断定できる犯人像は浮かばない。

死体には特に性的犯行がない為、快楽殺人ではない。愉快犯という事も考えられたが、それにしても飽きもせず同じ犯行を長い期間に渡り、続けている。

キリスト事件の模倣ではないかと言われ、キリスト事件では行われていない、被害者の喉を切り裂き、声を出さなくする事から、サイレント事件と名付けられた。

「シンバ、落ち着け。落ち着くんのだ」

頭を抱え、その場をグルグル意味もなく回り、奇声を出して、取り乱すシンバを、取り押さえるようにして、ジャンは、落ち着かせようとする。

「シンバ、話を聞け！ 頼むから聞いてくれ！」

ジャンはそう言うと、シンバの顔を持ち、自分の顔の方へ向かせ、そして、

「お前はこの事件から外れる」
そう言った。

それだけは嫌だと、シンバはジャンのシャツを引っ張るように持ち、首を振りながら、

「な、な、なななんで!?!」

呂律のまわらない口調で聞いた。

「一応、聞いておくが、お前、昨夜はマシユリーさんとどこで別れた?」

「………う、疑われてんの? オレ?」

「そうじゃない、一応だ、一応。わかるだろ?」

「………バス停で」

「そうか」

「ジャンさん、オレ、なんで外されるの? やっぱり疑われてんの? オレじゃない!」

「疑ってねえよ、それに誰もお前だなんて思っちゃいない」

「ならなんで!?!」

「お前はマシユリーさんの身内だろう?」

「だから!?!」

「兎に角、駄目だ」

「なんで!?! わかるように説明してよ!」

更にジャンのシャツを強く引っ張り、シンバは食い下がらない。

「今回ばかりは僕もジャンさんの意見に賛成だよ。シンバはサイレント事件から外れた方がいい」

ロシユが、ジャンの背後から現れ、そう言った。

「だからなんで!?!」

理由を言わない苛立ちに、シンバは怒鳴るように聞いた。

「被害者は加害者になるからだよ」

ロシユがそう答え、シンバは黙り込み、ジャンのシャツを持っていた手を緩め、そして、その手をダランと下へ落とした。

「今のシンバは物凄い感情が入っている。そんな状態で事件を解決できる訳がない。それに万が一、犯人が見つかったとしても、シンバはその犯人をどうするの? 今のシンバ、殺しかねないよね?」

「………殺さないよ」

「そうかな?」

「そうだよ！ 殺さないよ！」

「でも身内を殺されてるんだよ？ そこに復讐心は生まれなの？」

「犯人はオレが裁かなくても、法が裁いてくれるさ！ サイレント事件の被害者はもう30人以上。それも残虐で許される行為じゃない！ 犯人は死刑だ！」

「……でも犯人が、まだ未成年だったら？」

「そんな訳ないだろう！！！！」

そう吠えたシンバに、ロシユは、

「どうして？ この事件が20年も続いているから？ 当時8歳の子供も、28になってるもんね、あ、もう21年になるのか、だとしたら、29か？」

そんな事を言い出すから、シンバはゴクリと唾を飲み込む。

「でもさ、もし未成年だったら、シンバはその犯人を許せるの？」

「……」

「大事な人が殺されて、もう二度と会えなくて、なのに未成年と言うだけで、加害者は15年から20年、刑を終えたら何食わぬ顔でこの世に出てきて、普通の人に紛れて生活をして行く。法は罪を犯した少年達を裁かない、寧ろ、罪を犯したにも関わらず、少年達を守ってる。それでシンバは許せるの？」

許せる訳がない。

だが、シンバは口に出せない。

初めて、被害者側の気持ちを理解するシンバ。

「兎に角、シンバは少し休暇をとって、ゆっくりすれば？ マシユ

リーさんの死を自分の中で受け止める為にもさ。後は僕達に任せて」

「いや、でも」

「あ、マシユリーさんの息子さんが殺人課の方に来てるらしいよ、従兄弟だろ？ 会ってくれば？ 奥さんは死別してるみたいだね」
それを聞いて、シンバは鼓動が早くなる。

レーチュルの身内を調べられては、叔父ではない事がバレしてしまうからだ。

だが、殺人課の者が、レーチュルとシンバが月1で会っていた事など知らないだろう、そしてネット犯罪課が、身内を洗い浚い調べないだろうが、シンバは不安になる。

更に、ジャンが、とんでもない事を言い出す。

「キリスト事件のルシファー、あたるか。少年院の方に連絡して、本名と実年齢、それから今どこで何をしているのか、わかる限り聞き出してみるか」

シンバは呼吸をするのを忘れ、動揺しながらも、平然とそこに立って見せている。

だが、それも精一杯。

今にも倒れそう。

「ジャンさん、逆に危険度上がりませんか？」

「なんでだよ」

「ルシファーが捕まってから起きた事件の事を、ルシファーに容疑をかけるような事をして、ルシファーは黙っているでしょうか。それでなくても、今、ルシファーは普通の人に紛れて、普通の生活をしています、そこに安心感があれば、それを壊す事になります。世間の目も、警察である我々がルシファーに容疑をかける事により、ルシファーは、ルシファーってだけで人々にサイレント事件の犯人に仕立て上げられる可能性もありますよ」

「確かに」

と、頷くジャンを見て、シンバはやつと呼吸を吸って、吐いた。

「あの、やっぱりオレ、休暇はいらぬ。オレをこの事件から外すも何も、この事件は殺人課の事件だから、オレが関わる必要ないなら、それでいい。ジャンさんもロシユも、この事件を調べたいなら調べればいい。オレ抜きで」

「だが、身内が被害者の場合は仕事なんて、まともに来やしないだろう？」

そう言ったジャンに、

「この課のボスはジャンさんやロシユじゃない。ボスに言われた

のなら従うが、そうじゃない場合、従う理由はない」

らしくない口調と台詞で、そう言つと、シンバは、自分のデスクに向かい、椅子に座つて、冷静さを装った。

本当は休暇をとりたい。

レーチュルがサイレント事件の被害者となつたと言つ事は、聞く迄もなく、レーチュルは亡くなっている。

それを考えただけで、精神だけでなく、身体にまで異常が出てきている。

軽く手の痺れを感じる程、感覚が麻痺していて、それは脳へも影響して、思考がおかしくなっているのもわかる。

だが、ここでレーチュルの死を悲しみ、休暇をとつて引き籠もっている間に、ルーセン・C・ファークレイだという正体がバレてしまふ心配の方が大きいシンバは、ここにいなければならない。

ここにいると言つ事は仕事をしなければならぬ。

そして、サイレント事件の犯人を捕まえなければならぬと、シンバは思っていた。

その為には、しっかりと正常な思考を保つ事だ。

「シンバ、マシュリーさんの息子さんに会わなくていいのか？」

ロシユが、向かいのデスクに座りながら聞いて来た。

「うん、いいんだ、オレ、別にマシユーとは血縁関係ないから」

ここは正直に言つた方が身の為。

「え？」

「只の知り合い。でも知り合いつて言つても、年齢が離れ過ぎてて、仲良くしてるのって変に思われるかなあつて思つて、叔父つて言つただけだから」

言いながら、シンバは自分のデスクのパソコンに電源を入れる。

サラリと出てくる台詞と無表情に近いシンバは、いつもの、よく知っているシンバではなくて、ロシユは不思議に思う。

まるで二重人格みたいだと。

昨夜、サイレント事件が起きた事で、皆、それぞれ事件を自分なり

に推理しているのだろう、各自、仕事をしながらも、いつもより無口だ。

シンバの上に置かれたサイバーストーカーの書類。それに目を通しながら、シンバは辺りを気にしつつも、パソコンのキーボードをゆっくりと打っていく。

殺人課のパソコンに浸入し、サイレント事件のファイルを盗む！さすがにセキュリティが厳しいので、なかなかうまく行かない。時間制限もあり、辺りを気にできずに、パソコン画面に集中してしまふシンバ。

背後にロシユがいる事にも気付かず、無我夢中。

「ハッキングは犯罪だよ、シンバ」

そう言われ、ビクツとして、振り向くと、ロシユが、

「何やってんだ、手を離すなよ」

と、キーボードの上、踊るように指を動かし、あっという間に、サイレント事件のファイルをインストールする段階まで持って行った。

「な、なんで？」

「違った？」

「違わない」

「だろ？」

「いや、でも、なんでわかった？ オレがサイレント事件のファイル盗むって」

「悪いけど、パソコンのキャリアが違うよ、僕とシンバとじゃあ・・・向かい側からシンバの手の動き見てれば、何をしようとしてるのか、直ぐにわかる」

自慢気にメガネを中指でクイツと上げて、ロシユは言う。

「なら、どうして止めずに、共犯になってくれた？」

「共犯？ 冗談でしょ、ハッキングはシンバがやったんだよ、だってコレ、シンバのパソコンでしょ？」

「じゃあ、止めなかった理由は？」

「僕はボスじゃないからね、その事件に関わるなって言う権利ない

から」

そう言ったロシユに、シンバは少し笑みを零した。

「笑ってんなよ」

と、シンバを軽く突き飛ばすように、背中を叩き、ロシユも笑みを零す。

レーチュルが最後に言った台詞が、今のシンバを救う。

？ キミの仲間達のように、私も只の友人としてね、キミに会いたい？

マシユー、オレは友人がいたんだね。

仕事仲間だと一線を置いていたのはオレの方。

さりげなく、こうして、オレをフォローしてくれる友人が、オレにはいるんだ。

オレはルーセンじゃない。シンバだから……。

突然、電話が鳴り、それを取った刑事が、電話を切った後、

「ダンル南駅のコンピューターがテロにより遮断されてるらしい、現場に向かう」

そう言うと、上着を着て、何人かの刑事と出て行った。

少し人数が減った御蔭で、周りを気にせず、ファイルを開けれそうだ。

勿論、ロシユも、サイレント事件のファイルを見るようだ。

「ああ！ クソツ！ パスワードが必要だ！」

ファイルが開かない事に、シンバは苛立って、そう言った。

6つのキーは数字だけなのか、アルファベットだけなのか、数字や記号も含めたものなのか、さっぱり見当もつかない。

パスワードを考えながら、適当にキーを打ってみるが、当然どれも当たらない。

「シンバ、聞きたい事があるんだけど」

「なに？」

「もしかしてシンバは前科がある？」

パスワードの事が一気に頭から離れ、シンバはロシユを見る。

「ああ、いや、マシユリーさん、ソーシャルワーカーの仕事してたみたいだし、シンバは彼を叔父と言っていたけど、突然、叔父じゃないと言い出して、単なる知り合いだとも言ったよね、知り合いと仲がいいのは不思議じゃないけど、一ヶ月に一回はシンバと会ってるみたいだったし、それは仲がいいと言うより、定期的？ そう感じるだろ？ それに、シンバの並外れた体力と瞬発力や持久力は、ちょっとやそつとの鍛え方とは思えなくて、だったらやっぱり軍に入っていたか、少年院かなって。全部、僕の憶測と勘で、証拠も何もないよ」

シンバの顔が険しくなり、黙り込んで、パソコンのキーを打つ手も止まる。

「ああ、ごめんね、別にさ、ほら、いいんだよ。どっかの国では小さな罪だとしても、罪を犯したら、警察という組織で働く事は無理らしいけど、アグルスは特にそういう事はないし、罪も、シンバなら、もう償ったも同然だよ、多くの犯人捕まえて、多くの人を助けたんだから」

「……いつか話すよ」

「いつか？」

「うん。いつか話す。だから今は聞かないで」

シンバがパソコン画面を見ながら、そう言うので、ロシユは頷く。

ロシユの顔を見て言った訳じゃないので、話す気なんて、全然ないのかもしれない。

だが、それでもいいと、ロシユは思った。

今は過去の事件より、目の前の事件の方が重要だ。

シンバは何度も適当な記号で、パスワードを試みる。

「おい、お前等、仕事もしねえで、おもしれえ事やってんじゃねえか」

ブラックコーヒー片手にジャンが背後でそう言った。

「ジャンさんも仲間に入れて欲しいの？」

ロシユが振り向いて、そう聞くと、

「ロシユ、お前に客だ。ローカで待ってる」と、ジャンがそう言った。

「客？ 僕に？」

「ああ、昨夜の女」

ジャンがニヤニヤしながらそう言うのと、ロシユは面倒そうに溜息を吐いて、ローカへ出て行った。シンバはロシユの背を見ながら、

「昨夜の女って？」

と、ジャンに尋ねる。

「アイツ、酒弱いのだ。無理に飲ませたら、ひっくり返ってよ。それでアイツの携帯が鳴ってたから、俺が出たら、ロシユの彼女だって言うから、迎えに来てくれって、お願いしたんだよ、そしたら、結構な美人がさ、来た訳よ」

いやらしい笑いを浮かべながら、ジャンがそう言うので、シンバは頷きながら、

「見て来ていいかな？」

興味津々でそう聞いた。

「いいんじゃないの？ お前も好きだねえ」

何が！？と思っただが、シンバは突っ込まず、席を立ち、ローカに出る扉をソツと開け、ロシユとロシユの彼女だろう女性を盗み見する。シンバの背後で、ジャンまで盗み見する。

肝心のロシユの彼女が、ロシユの体で隠れて、よく見えない。

「いちいち言わなきゃわかんない訳！？」

突然、ロシユが大きな声を出す。シンバとジャンはビクツとして、扉を閉めたが、再び、扉をソツと開け、2人の様子を見る。

「迷惑なんだよ」

突き放すようにロシユは、そう言って、女性に背を向けると、こちらに向かって来た。

「おい、シンバ、早くドア閉める！」

ジャンがそう言うが、シンバはドアを閉めず、それどころか、ドアをバツと勢い良く開けて、女性を見つめる。

「シンバ？」

ロシユがシンバに気付कि、足を止め、シンバを呼ぶが、シンバは、ロシユの声など耳に入っていない。

シンバの瞳に映っているのは、ロシユの彼女という女性だ。

ふんわりとウエーブがかつた肩までのブロンドの髪と、白い肌と、グリーンの優しい色を放つ瞳。女性の、その全てが、今のシンバの全てを停止不能にする程、惹き付けている。

「シンバ？　どうかしたのか？」

ロシユがシンバの隣に立ち、シンバに声をかけるが、シンバは身動きせず、只、女性を見つめ続けている。

盗み見したとバレルのが嫌で、とつくにジャンは逃げている。女性も、じつと見つめてくるシンバを、不思議そうに、じつと見つめ返していたが、余りにも見つめてくるので、困った表情をした後、ペコリと頭を下げ、帰って行く。

シンバは、女性の後姿さえ、見続けて、女性が階段を下りる為、曲がった所で、ハツとして、そこで初めて横にいるロシユの存在に気付कि、

「どうかしたのか？」

と、言うロシユの声も、やっとシンバに届いた。

「……………あ、いや、あの、彼女……………凄く可愛くて

」

そう言ったシンバに、ロシユは、

「わかりやすいな」

と、鼻で笑う。

「ロシユの彼女なんだろ？」

「ああ、でも別れたいの。でも別れてくんないの。それでまたイラストすんの」

ロシユは言いながら、煙草を取り出し、口に啜え、ライターで火をつける。

「なんで別れたいの？」

「は？」

「だって、あんなに可愛い」

「あのね、シンバ、可愛くても別れたい女は別れたいの。ブスでも別れたくない女は別れないの。そういうもんでしょ」

そう言われても、シンバには、よくわからない。

「気に入ったの？」

そう聞かれ、だが、それもよくわからない。

わかる事は、彼女は、ハニエルにソックリだと言う事。

もしもハニエルが生きていて、大人になっていたら、きっと、あんな風。

シンバの時間が巻き戻されていき、ルーセンになる。

それはルーセンがルシファーになる前。

ハニエルと手を取り合い、笑い合った日々。

ルーセンにとつて、大事な想い出。

それだけが、とてもとても大切な想い出。

それ以外、何も無い。

ルーセンは、それ以外、何も無いのだ。

「シンバ？ そんなにぼんやりする程、彼女を気に入ったのなら、紹介してやろうか？」

そう言ったロシユに、

「冗談だろ、ロシユの彼女だろ、大事にしてやれよ」

少し嫉妬も入ってか、キツイ言い方で、ロシユを睨む。

ロシユも、そんなシンバを面倒に思ったのか、その日は、お互い、余りコミュニケーションをとらず、結局サイレント事件の事も、そのままになっていた。

シンバはサイレント事件のファイルのパスワードを、殺人課の刑事に聞きだす方法を考えるが、殺人課の刑事に知り合いいはない。

唯一、ルディー・アングスを知っている程度で、彼はジャンと言いかいをしてるか、皮肉を口にしてるか、もしくは、犯人とわかれば暴力を振るっているか、余り友好的な部分を見た事がない。

確か、犯人を捕まえて、その場で半殺しにして、クビを宣言されたとか。

結局、クビにはなっていないけど、それ位、無茶をする人なんだよなあ。

それに年齢もジャンさんと同じくらいだろうし。

オレの話なんて聞いてもらえそうにないよなあ。

「おい、シンバ、お前、もう帰っていいぞ」

その声に、顔を上げると、ジャンが、

「夜勤は俺が当番だろ」

そう言うが、シンバは家に帰っても、どうせやる事もないし、パソコンもないし、仕事を続けたかったので、

「ジャンさんの方が疲れてるんじゃないですか？ 早朝からずっとでしょ？ 今日は夜勤、オレがしますよ」

そう言った。気がつけば、ロシユの姿はなく、とっくに帰ったようだ。

「いいから帰れって。マシユリーさんの事で、何かに打ち込んでないと辛いのはわかるが、そういう時は少しでも休んだ方がいい」

「……ジャンさん、マシユリーの遺体って、今はどこに？」

「まだ病院だろ。行くなよ？」

「行きませんよ」

正直、マシユリーの死体を見たくはない。

死んだなんて、思っていない。

きっとマシユリーは生きていると、願うように思っているシンバ。

「よし、じゃあ、帰れ」

どうしても帰らせたい、いや、休ませたいのだと思い、シンバは頷いて、素直に帰る事にした。ジャンなりに心配してくれてるのが、シンバは嬉しかったからだ。

マシユリー、オレはもう1人じゃないんだと思う。

マシユリーがいなきゃ、1人だとオレは思っていたけど、そうじゃないみたいだ。

それはきつと、マシユの御蔭なんだと思う。

外に出ると、小雨が降っていた。

シンバは傘を持ってない為、上着を脱ぎ、頭から被るうとして、ロシユの彼女が立っているのを見つける。

駆け寄って、何故か引き返し、だけど、また近寄っては、また戻るシンバは、同じ場所でグルグル行ったり来たり。

そして、決意するように、ガッツポーズをする感じで拳をグッと握り締めて、彼女に近寄り、声をかけた。

「ロシユを待つてるの？」

そんなつもりはなかったのに、大きな声が出てしまい、しかも加減を知らないシンバは思いつき顔を近付け過ぎて、彼女は驚いた顔で、後退りしながら、ギョツと身を強張らせた。シンバも、そんな彼女の態度に、身を強張らせ、何故か後ろへ2歩も下がりながら、

「ロシユなら帰ったみたいだから」

「中途半端な距離感を開けて、そう言った。」

「多分。いなかったし」

「………待つてるって言ったのに」

「あ、そうなの？　じゃあ、いるのかもしれない。もう一度、見てこようか？」

シンバがそう言った時、遠くから悲鳴が聞こえた。

聞こえた瞬間、シンバは走っている。

ロシユの彼女は両手で口を押さえ、シンバの行動の早さに驚くばかり。

目の前の通りは歩道橋を渡らなければ、かなりのスピードで車が行き交っている為、渡れない。にも関わらず、シンバはダッシュで、行き交う車を擦り抜けるように、渡り切る。

その間、シンバの足は一度も止まっていなかった。

まるで神様がシンバに奇跡を与えているかのように、シンバの行く手を邪魔するものはなく、向こうから小さな女の子を抱いて走って

来る男に向かつて走っている。

体の大きな男はニット帽を被っていて、乱暴に女の子を抱きかかえ、持っているナイフで、辺りにいる人を切りつけながら、走ってくる。「誰かー！ 娘を助けてー！」

遠くの方で、女の子の母親らしい悲鳴に似た泣き声が聞こえる。

「どけえ！！！！！」

ニット帽の男は走って来るシンバに、そう吠えながら、ナイフを振り上げ、シンバは走る速度を上げ、男の振り上げた太い腕に向かつて手を伸ばし、男の二の腕を両手で掴むと、走る勢いに任せ、その腕をグルンと後ろに回し、捻った。

「離せえ！ 子供を潰し殺すぞ！！！！！」

そう叫んだ男に、シンバは、

「そしたら、お前の腕を？いで、お前の持っているナイフで、お前の腹を裂いてやる」

そう言つて、更に、男の腕を強く捻る。

男はコクコク頷き、

「わ、わかった、わかったから」

と、女の子をソツと下におろすと、グルンと振り向き、シンバの頬を大きな拳で殴りつけて来た。シンバは殴られた事により、ガクンと下に落ちると、力を喪失したかのように見せかけ、油断している男の腹部に自分の頭を思いつきり突いて、男を前のめりにした後、男の顎へ向かつて、拳を入れた。

男は仰け反るように、後ろへ一歩、二歩、後退し、ニット帽が地に落ちたのと同時に、ボタンと仰向けに倒れた。

シンバはハアハアと呼吸を乱し、男の手首に手錠をかけると、そこにいた人達が、皆、シンバに拍手をする。

女の子の母親が泣きながら、シンバに頭を下げる。

女の子はキョトンとしながらも、母親と一緒に頭を下げる。

シンバは殴られたせいで、唇を切ってしまい、少し血が出ている。

女の子はハンカチを差し出し、シンバにニッコリ笑って見せながら、

「ありがとう」
そう言った。

こんな場面なのに、シンバの中のルーセンが蘇ってくる。
途端、やり切れない気持ちになり、シンバは愛想なく、差し出されたハンカチを無視して、男を引き摺るようにして、警察署へと運ぶ。
呆然と立っているロシュの彼女に気付き、

「あ、ごめん、ちょっと待ってて？」

そう言うと、シンバは署の中に、まだ気絶している男を入れて、適当にその辺に寝かせたまま、ジャンを呼びに行こうとした所で、ルディーが現れた。

「どうしたんだ、その男」

「今、直ぐそこで小さな女の子を連れ去ろうとして、捕まえました」
「気絶してんのか？」

「はい、ちよつと本気になりすぎて、思いっきり顎にヒットしちゃいました」

「お前、ネット犯罪課のシンバ・フォートだな」
ルディーにそう言われ、シンバはコクンと頷く。

「よくジャンと一緒にいるからな、よく知ってる。現場で扱き使われてるようじゃないか」

ハハハと愛想笑いしながら、やつぱり、まわりから見ても、ジャンに使われているように見えるんだなあ、シンバは思う。

「ジャンじゃなく、俺につかないか？」

「はい？」

「お前はネット犯罪課なんて所にいる器じゃない。殺人課で、本領発揮したらどうだ？」

言いながら、ルディーは気絶した男をマジマジと見つめ、そしてシンバとの体格の差を把握する。

シンバより、縦も横も大きい、そして、それなりに筋肉質のいい体をした男が気絶しているのだ、ルディーはシンバの強さを確認している。

「お前なら、俺と一緒にサイレント事件を追えそつだ」
ルディーがそう言つて、ニヤリと笑い、シンバを見る。
シンバは頷きたくなるのを押さえ、

「……………考えさせて下さい。オレはジャンさんが好きだから
」
そう答えた。

「忠誠心も強いと来たか、益々欲しくなつた」
と、ルディーも引く様子はない。

「あの、この男、お願いしてもいいでしょうか？」

「俺の仕事じゃないだろ、管轄外だ」

それを言うなら、シンバも管轄外だ。

「でも、あの、オレ、外に人を待たせてて、もう行かないと
」

「じゃあ、貸しと言つ事で」

そう言われ、シンバはペコリと頭を下げ、その場を去つた。

ロシユの彼女は待つていてくれたが、小雨とは言え、ずっと外にい
る為、結構濡れていて、寒さのせいか、震えている。

「ごめん！」

「あ、いいの」

「えつと、なんだっけ、あ！ そうだ、ロシユがいるか確認して来
るんだつた！」

しまったと、シンバは戻ろうとした時、

「もういいの！」

そう言われ、シンバは動きを止めて、女性を見つめる。
俯く女性。

シンバはゆっくりと彼女に近付く。

「……………泣いてるの？」

「違つわ、雨のせいよ」

「……………ロシユに電話してみようか」

「いいの、わかつてるから」

「わかつてる？」

女性はコクンと頷き、

「彼、私と別れたいの。昨夜も喧嘩しちゃって。だから何とかしたくて、ランチを誘うついでに話し合おうと仕事場まで来ちゃって。

いちいち言わなきゃわからないのかって言われちゃったわ。言わなくてもわかっているわよ、別れたいんでしょって、そう言えないの、私、わかってても、わからないふりして、彼の傍にいるしかできないから」

「……………」

「仕事が終わる頃、待ってるからって言ったんだけど」

「……………」

「あんまりしつこいと嫌われちゃうわね、これ以上、嫌われたら、意味ないのにな」

悲しげに笑う彼女に、シンバは何を言えばいいか、わからなくて、少し慌ててしまう。

だが、

「多分、今は、仕事が忙しくて、だから、ロシユは少しだけ気が立ってるだけだよ」

と、シンバはちゃんと彼女を慰める台詞を吐いた。

「ありがとう」

そう言った彼女に、シンバは黙り込む。

「ありがとう？その言葉は好きじゃない。」

礼を言われるような人間ではない。

そのせいか、シンバの表情が無になる。

「あ、あの……………アナタ、すごいよね」

「え？」

「さっき、よく通りに飛び出して行ったわね、ビックリしちゃったさっきまでとは違う明るい表情で話し出す彼女。」

「車に轢かれちゃうって思わなかったの？」

「思わないよ」

「どうして？」

「だって、向こうから来る車のライトで車が来るスピードがわかって、何秒で走り抜ければいいか、計算すればいい。ここから通りに出るまでの間、走りながら、何台目の車の間隔が一番開いてるか、ライトで確認して、その車がここを通る頃が、後何秒後か、車のスピードと道の長さで計算したら、その答え通りに、通りの前に着くようにして、後は、その車の前の車が通過してから、何秒で次の車が通過するか計算したら、オレは計算された時間内で向こうの歩道に渡ればいい」

「……………それを走りながら考えたの？ 悲鳴が聞こえた瞬間直ぐに？」

「うん」

「凄すぎてビックリ」

「そう？」

「でも時間内に向こうに渡るなんて、3秒もなかったわよね？」

「充分だよ」

「……………凄すぎてビックリ」

同じ台詞を言う彼女に、シンバは笑い、彼女も笑う。

目の前で動いている女性を見ながら、シンバはトリップしそうになる。

「ねえ、アナタ、名前は？」

女性の唇がそう動き、まるで、あの頃のように。

「ねえ、アナタ、名前は？」

ハニエルが、笑顔で尋ねる。

「ルーセン。ルーセン・C・ファークレイ？」

そう答えるボク。

「……………ルーセン・C・ファークレイ」

シンバはトリップしたままで、女性に、そう答えた。

だが、その声は囁きのようで、

「え？ ルーセン？ ルーセンなんて？」

よく聞こえてないようだ。それでも、？ルーセン？と呼ぶ女性の声

が、あの頃のハニエルのように、いや、本当はハニエルは生きていて、ここでこうして出会っているとは錯覚する。

ふわふわのウェーブの髪の毛も、微笑むと細くなるグリーンの瞳も、ハニエルだ。

そして、ハニエルは、こう言うんだ。

？私はハニエル。ここではそう呼ばれてるの？

だから、ボクは。

「ねえ？ どうしたの？ ルーセン？ 先に自己紹介した方がいい

？ 私はロル・アスト」

「え？」

「あ、だから、私はロル・アスト。ルーセンは、ルーセンなんて？」

「……シンバだよ、オレはシンバ・フォート」

「シンバ・フォート？ ごめんなさい、私、よく聞きとれてなくて、全然違う名前を……」

「別にいいよ」

ハニエルという名前じゃなかった事で、現実へ引き戻された。

「シンバは、ロシユとは同じ課？」

「うん」

「じゃあ、シンバもロシユと同じでパソコンに詳しいのね」

「いや、オレはどちらかと言うと、現場直行って感じ」

そう言ったシンバに、納得と笑うロル。

「雨も止んだみたいだし、帰るわ。ありがとう、シンバ」

「あ、待って。送るよ、危ないし」

時刻はPM6:00をまわった所で、車はライトをつけて走っているが、まだ暗いとまでは言えない。

だが、さっきの女の子を連れ去る現場を目の辺りにしたロルに断る理由はない。

「ロシユなんて、酔ったって言うから迎えに行けば、喧嘩して私を夜の町に放って帰っちゃうのに、シンバは優しいわね」

「それ、昨夜の話？」

「そう。シンバもいた？」

「うん、でもロシユより先に帰った。連れの人が最終のバスで帰るって言うから一緒に帰ったんだ」

「そうだったの、最終のバスって事は結構遅いよね、じゃあ、入れ違いだっただわ、私と。大体、その位の時間に、私も店に行っただから」

「そういえばジャンさんが、無理にロシユにお酒を飲ませたら直ぐにダウンしたみたいな事を話してたから、オレが店を出した後、ロシユは直ぐにダウンしたのかも。それでロルが迎えに来たんだ。うん、入れ違いだっただわね、きつと」

すっかり普通に会話できているシンバ。

ロルも、シンバに何の警戒心もなく、心を許している笑顔を見せる。歩いて、30分程で着いたマンションの前で、ロルはここだと言う。シンバは、もつと歩いて話していた気分だったが、普通に会話ができる、女性を散歩などに誘う勇氣はない。だから、

「うん、じゃあ、また」

と、手を上げる。ロルもコクンと頷き、笑顔で、

「またね」

そう言うので、またシンバは、

「うん、また」

と、手を上げて、今度はバイバイと振ってみる。

「またね」

ロルも、またそう言うので、シンバは

「うん、また」

と、再び手を上げる。

「またね」

何度同じ事を繰り返すのだろう、シンバがなかなか立ち去らないから、ロルも、またそう言って、笑顔でシンバを見ている。

次こそは背を向けて帰ろうと決め、シンバは、

「うん、また」

再び、そう言つて、手をあげた時、

「お茶でも飲んでいく？ 雨で濡れたから冷えたでしょ？ タオル貸してあげるわ」

ロルが思いも寄らない台詞を吐いたので、そんな台詞を計算してなかったシンバは停止してしまふ。

「どうしたの？ なんでフリーズ？」

悲鳴を聞いただけで、全てを把握し、全てを計算して、一瞬で現場に飛んでいくヒーローみたいな人が、予測不可能にフリーズしてしまふ。

そんなシンバがおかしくて、クスクス笑いながら聞くロルに、

「い、いや、だって、えっと、いいの？」

シンバは、もう少し一緒にいてもいいの？ と言う意味で聞いたが、ロルは、

「ええ、ロシユの友達なもの」

と、シンバを男性として、一線を越えないと、柔らかい口調ながらも、キツチリと釘を打った。

だが、釘を打たれなくても、シンバはロルに手を出す事など考えてもない。

只、一緒にいたいだけ。

幼い恋みたいなものであつて、そこに、いやらしい感情は全くない。だが、シンバはロルをロルとして見て、好感を持っているのか、それともハニエルの影を追っているのか、わからない。

エレベーターでマンションの6階へ移動し、ロルは角部屋の部屋のドアの鍵を開け、中へ入る。シンバも緊張しながら、中へ入ると、そこは知らない香りが漂う場所で、ふんわりとしたカーテンや白をベースにした家具等に、シンバはドキドキした。

誰かの空間に入るのは初めて。

昔、初めて、教会へ足を踏み入れた時の事を思い出した。

神聖で、美しく、邪悪さが全くない場所。

その全てに一瞬にして心を奪われた、あの時と同じ気持ちになった

。

「シンバ、紅茶でいい？ 美味しいミルクティー淹れてあげるわ。これタオル。それから、そこに救急箱があるから」

「救急箱？」

「口の横、少し切れてるみたい」

そう言われ、ああ！と、シンバは口元を指で触れて、

「大丈夫だよ、大した事ない」

そう言ったが、殴られた頬が少し腫れている。明日は青痣になっているかもしれない。

「結構、濡れちゃったわね、ジャケット、ドライヤーで乾かす？」

シンバは頷き、ジャケットを脱ぐと、ドライヤーを貸してもらい、濡れた部分を乾かす。

乾かしながら、部屋を見回す。

綺麗に片付いている本棚には、沢山の童話があり、シンデレラ、白雪姫、人魚姫など、女の子が大好きな話が揃っている。

棚の上には可愛らしいキャンドルが並び、アロマランプもある。窓辺には小さな鉢植え。

「ねえ、立ってないで、こっちへ座って、乾かしたら？」

と、丸いテーブルの上、大きなマグカップになみなみと注がれたミルクティーを置いて、ロルは座った。

シンバもロルと向かい合わせに座り、ドライヤーを止めて、ジャケットを椅子の背もたれに干すようにかけて、ミルクティーに手を伸ばす。

あんまりなみなみと入っているから、シンバは口元をカップへ持つて行き、啜るように飲む。口の中の切れている所には、しみたが、温かい紅茶は冷えた体には美味しかった。

「音楽聴く？」

と、ロルはステレオコンポにCDを入れ、流れる曲に少しリズムをとりながら口ずさむ。

そして、シンバと目が合うと、ニッコリ笑い、

「知ってる？」
そう聞いた。

「いや、音楽はよくわからない」

「ロシユと同じね。仕事柄、忙しくて聴く暇ない？」

「忙しくても音楽くらいは聴く余裕あるかもしれないけど、只、音楽センスなくて。でも、聖歌は好き。初めて、感動したからかな」

「聖歌？ クリスマスとかにまわってくる奴ね。聖歌隊ってどうしてお金とるのかしら、いらないうって言うてるのに、歌って、お金とって帰るわよね」

「そうなの？」

「そうよ、そんなの裕福なうちに行けばいいのに」

「裕福そうだけど？」

「まさか！ マンションに住んでて、綺麗な家具に囲まれてるからって、そうとは限らないわ、人間はね、表の顔と裏の顔があるんだから。でしょ？ 刑事さん」

そう言って笑うロルに、シンバはコクンと頷き、笑って見せる。

「お腹空いたね、何か作りましょうか、それともピザでも頼む？」

「……奢るよ、ピザを頼もう」

こうして家にも入り、紅茶までもらい、服も乾かして、それ以上、望む必要がなかったシンバは、ピザを注文する事に頷いた。

ピザのメニューを見ながら、2人で、いろんな種類のピザに迷う。

結局、オーソドックスなマルゲリータとシーフード。

「ビールは？」

「あ、アルコールは駄目なんだ」

「ロシユと同じね」

彼女は、何回、その台詞を言うだろう。

「ロルは飲んでいいよ」

「うん、でも、やめとく」

ニッコリ笑い、そう言って、電話の受話器を取り、ピザを注文する。彼女は、なんて柔らかい動きをするのだろう。

滑らかな指の動きも、瞬きする長い睫毛も、グリーンの瞳に反映する全ての物も。

動く度に揺れる、ふんわりした髪から漂う香りも。
口元が上にあがり、にこやかに笑う薄いピンク色した唇も。
ロルの全てに、シンバは魅入る。

「……ハニエル」

思考が飛び、そう呼んでしまう程に。
彼女の喋る声は、昔聞いたハニエルの声と似ている。

意味のない会話も、シンバにとっては、その声を聞く事に意味があり、時間なんて、あつという間に過ぎていく。

やがて、ロルは寝てしまい、シンバは、食べかけのピザの横に、ピザ代を置いて、それからシンバは考えて、考えて、考えて……

メモを残した。

そこにはメッセージの他に、携帯番号とアドレスを書いて、
マンションを出ると、土砂降りの雨。

折角、ジャケットを乾かしたのに、今度は濡れだ。

マシユー、今日の事、誰に話せばいいかな。

きつとマシユーに話したら、驚くね。

女性の部屋に入って、一緒にピザを選んで、一緒に食べたなんて。

？やるじゃないか、シンバ？って、笑顔で言うかな。

でもロシユの彼女だから、友達以上の関係にはならない。

少し落ち込んでそう言うと、マシユーは？友達、大いに結構！
？って言うだろうね。

うん、彼女、ハニエルに似てて、だから友達でいいんだ。

だけど、マシユーはこう言うんだ。

？やめとけ、もう関わるんじゃない。彼女は似ててもハニエルじゃないだろう？

でも、マシユー、ボクは……

？苦しむのはシンバだ。やめとけ。もう忘れるんだ、あの頃の事は？

苦しんでもいいんだ、ボクは只、彼女の？次？がほしい。

また会える？次？が！

そう思うシンバは、確実にルーセンになっていた。

もう現実に縛るものはなく、正しい方向へ導く助言もなく、今、シンバは残酷にも、マシユーの死を受け止めている。

死を受け止めるには、今日の今日で早過ぎるが、シンバは、このルーセンの感情を止める者がいない事に、嬉しく思い、それは受け止めていながら、現実逃避にも似ている。

ハニエル。聞いて？

今日、キミに出会えたんだよ、この世界で。

キミと初めて逢った時のような気持ちになる、きつと、ボクは。

6・八二エル

あんなに土砂降りの雨は、シンバが家に着いたと同時に小雨になり、今朝は雲ひとつない程のいい天気。

昨日の雨のせいで、少し風邪をひいたか、シンバは鼻を嚙りながら、いつものように出勤した。

昨夜、夜勤だったジャンはいない。

特に呼び出しもなかったので、ネット犯罪課での、大きな事件はなかったのだろう。

欠伸をしながら、デスクに鞆を置いて、パソコンに電源をつけるのはロシュ。

昨日、ロルと会い、ロルの部屋に行った事を話すべきか、シンバはロシュを見る。

その視線に気付き、

「なに？」

と、ロシュはシンバに尋ねた。

「いや、あの、眠そうだね」

「ああ、昨日、突然、大雨だったろ、雨宿りに映画館に入って、久々のレイトショーだよ」

映画の半券をジーンズのポケットから取り出して、そう言った。

「一人で、あんな時間まで外にいたの？」

「一人じゃない、彼女とだよ」

「え！？ だってロルは」

「ああ、ロルじゃない。別の」

「彼女は一人だろ！ ロルが可哀想じゃないか！」

椅子から立ち上がり、そう叫ぶシンバに、

「何？ 何かあったの？ そんなにムキになるとこ？」

と、不思議そうなロシュ。

「き、昨日、外で雨降ってるのに、ロルが待ってたよ」

「そういう所が嫌なの。なんでわかんないかな、あの女」

「オレはそういうロシユが嫌だ！」

「でもシンバが慰めてやったんだろ？」

「え？」

「良かったじゃないか、気に入ってんだろ？ 幾らでも僕を悪者に
していいからね」

「なんでオレが慰めたって!？」

「なんでって、ロルの名前を知ってるって事は、ロルから聞いたん
だろ？ 僕は彼女の名前、シンバに話してないし、他から聞く事な
んてないと思っただから。違っただ？」

「ああ……」

頷きながら、刑事っていう奴は、いちいち些細な言葉を聞き逃さず、
見逃さず、勘が働くと思うシンバ。

言葉を選んで、行動に気をつけ、ロシユとは話さなければと考えて
いたら、突然、ドアが勢い良く開き、ルディーが入って来た。

「おい、フォート！」

シンバを見ながら、そう呼んだ。

フォートと呼ばれるのは、滅多になくて、一瞬、誰の事かわからず、
シンバはキョトンとして、直ぐに、

「あ、はい」

と、返事をした。

「ちよつと来い」

それだけ言うと、ルディーは出て行った。

「何かしたの？」

驚いた顔をしながら、ロシユが聞くから、

「多分、昨日、帰り際に女の子を連れ去ろうとした男を捕まえて、
それをルディーさんに任せたまま、帰っちゃったから、その事で話
があるのかも」

シンバはそう説明した後、席を立ち、ローカに出ると、腕組しながら
立つルディーがいた。

「えっと、スイマセン、昨日は」

「昨日？」

「女の子を連れ去ろうとした男を任せちゃったから」

「ああ、その事じゃない」

「え？」

「この電話番号、調べたら、お前の携帯みたいだな、フォート」

ルディーの手に持たれたメモに目をやり、シンバは、

「なんで!？」

と、声を上げた。

そのメモは、ロルの机の上に置いたメモだ。

「なんでこれを俺が持っているかってか？ 今朝、通報があったんだ」

「今朝？ 彼女………ロルから？」

「いや」

ルディーは、少し咳払いをし、

「ロル・アストは知り合いなのか？」

そう尋ねた。

「知り合いと言うか、ロシユの彼女で、昨日はロシユを待ってた彼女をマンションまで送りました。えっと、ロシユは彼女と別れたいらしく、待ってた彼女を置いて帰ったから、その、オレが彼女をマンションまで送って、その後、彼女の部屋でピザなどを食べながら談話しました。0時過ぎには彼女は眠ってしまったので、オレはそのメモを残し、帰りました。別に、そのメモを残したのは、変な意味じゃないですよ、ドアの鍵を閉める為に、鍵はポストに入れておくって、それで、一応、携帯の番号とアドレスを書いただけで、本当に深い意味はないです！」

「別に構わんよ、深い意味があるうが、なかるうが、携帯の番号を女に教える事なんざ、不思議にも思わん。そんな事を責めてる訳でも聞ける訳でもない」

「じゃあ、なんですか？ オレ、ストーカーで通報受けたんじゃない

いんですか？」

「女にメモ残したくらいでストーカーはないだろう、そんな女なのか、ロル・アストは」

「だって」

「それにストーカーなんて、この俺が動く仕事か？」

殺人課のルディー・アンガスなら、余程の事じゃない限り、管轄外だと動かないとしたら、これは殺人事件となる。

「まさか………ロルが………？」

「ああ」

「でも………サイレント事件ではないですよ、だって、今朝は誰も騒いでない」

そう、サイレント事件が起きた場合、他の課ではどうか知らないが、ネット殺人課では、ジャンが大騒ぎするせい、全員集合で事件解決へ、皆、意味もなく動き出す。

「昨夜、彼女とは何時まで一緒に？」

「0時過ぎ」

「確かか？」

「彼女のマンションから出た時、大雨で、家に着いたら小雨になりました。昨日の天気予報を調べてもらえば、正確な時間がわかると思います」

言いながら、シンバは体が冷えていくのを感じている。体の奥底から冷たいものが広がっていく。

「そうか、ま、一応、聞いただけだ、一応な」

ルディーがそう言って、自分の課に戻ろうとするので、

「あの！ 彼女は！？ 死んだんですか！？」

呼び止めて、問う。

ルディーは振り向き、

「想像通りじゃ駄目か？」

そう問い返す。

「想像できないから、聞いてるんじゃないですか！！！！！！」

そう叫ぶシンバに、ルディーは一步、近付き、

「興奮するな」

そう囁いた。

こんなにも呼吸を乱し、込み上げてくる熱くなる感情とは裏腹に、
どんだん体が冷える。

シンバは奥底から来る冷たい物が、どんだん溢れ、やがて、ガタガ
タと震えだす。

歯がガチガチ鳴り出し、シンバは今にも狂いそう。

「……………一緒に来るか？」

そう聞いたルディーを、シンバは震えをピタツと止めて、目だけ動
かして見た。

「言つたろ？ 俺につかないかって。来るなら、来い。上には俺か
ら報告しといてやる」

「彼女はサイレント事件の被害者になつたんですか？」

「いや、サイレント事件の括りに入れるかどうか、まだわからん」

「それって、サイレント事件とは違う方法で殺害されてるんですか
？」

「……………毒殺だ」

「毒……………？」

「自殺ではない。昨日の飲み食いしたであろうものは、鑑識にまわ
してあるが、お前も飲み食いしたんだろう？ だとしたら、毒はそ
れじゃない。だが、毒を飲むと言う事は、心許した相手からの物じ
やないと飲まないだろう？ 体には注射の跡もないしな。昨夜0時
過ぎまで一緒にいたと言うなら、尚更だな、そんな時間以降に会う
相手は親族か、恋人か、友人か」

「恋人……………ロシユには聞かないんですか？ アリバイ」

「一番最初に容疑者として上がったさ。だが、聞くも何も、昨日は
ずっと一緒だったと、うちの課の女がな。まあ、ほら、旦那がいる
身だから不倫関係になる為、余り騒ぐ立てたくないと言う話だ。だ
から一番最後に話を聞くという事になった」

「・・・・・・・・・・行きます、一緒に」

そう言ったシンバに、そうかと、ルディーは背を向けて歩いて行く。シンバはその背について行く。

サイレント事件と同じ括りに入れるか、どうか、わからないと言ったルディーに、シンバはサイレント事件と関連はあるのだろうと思っただ。

つまり同一の犯人である、何かを残している。

ルディーは車に乗り、シンバも助手席に座る。

「どこへ行くんですか？」

「現場。まだ死体をそのままにしてある」

「え！？ 型だけ残して死体は片付けるもんじゃないんですか！？」

「普通はそうなんだが、お前を連れて来る迄、そのままにしておくと命じてある」

「命じてあるって、オレと一緒に行かなかったら、どうするつもりなんですか！？」

「来るさ、お前はサイレント事件含め、今回の事件をどうしても解決しなきゃならない」

「・・・・・・・・・・」

シンバはゴクリと唾を飲み込んだ。

助手席に座りながら、隣で運転するルディーの顔を見れない。

何故なら、ルディーは知っている。

シンバの正体を！

そう察したからだ。

沈黙が怖い。

流れる景色も見れず、シンバは膝の上に置いた手をグッと握り締め、嫌な汗をかいている。

「・・・・・・・・・・髪は染めてんのか？」

そう聞いたルディーに、何も答えれないシンバ。

「目はカラーコンタクトか？」

「・・・・・・・・・・」

「そう堅くなるな、別にお前を責めてる訳じゃない、ルーセン・C・フークレイ」

「……何の話なのか、サツパリ」
とぼけ通せる自信もない癖に、シンバはそう言うしかなかった。
ルディーは笑いながら、

「お前は覚えてないのか？ 俺を」

そう聞くから、本当に何の話かわからなくなる。

「20年前、俺は22歳で、刑事になりたての初仕事がキリスト事件だ。あの頃から移動もなく殺人課にいるなあ、俺」

と、ルディーは想い出をクツクツと笑いながら話し出す。

「実際に解決したのは俺じゃないが、忘れないよ、あの事件は」

「……」

「とは言っても、お前はまだ小さな子供で、こんな強面の刑事が調べをする訳じゃなく、直ぐに施設送りになって、まだ刑事になりたての俺はお前を車で施設まで送るのが最初の仕事だったからな」
それを聞いて、シンバは、あの時の刑事かと思し出す。

「お前はあの時もそうして、俺の横でちょこんと座り、真っ直ぐ一点だけを見つめていた。緊張してるのか？ って聞いても無言だから俺はすっごく緊張してるんだって言ったら、お前、俺を見て」

「そういえば、あの時も、車内は煙草のニオイが充満してたなあ、覚えてます……？ おじさん、天使って見た事ある??」

シンバは、隠しても仕方ないと、そう言った。

「そう、俺に初めて喋った台詞はそれだよ、それ。シヨックだったなあ、まだ22歳なのにおじさん呼ばわりには。で、俺は？ 見た事はないけど、信じてるよ？ そう答えたな、確か！」

「嘘だよ、？ 見た事がないから、そんなもの信じない？ だよ」

そう言つて、シンバは少し笑って見せ、更に言葉を続け、

「？ どうして？ ボクが見せてあげたでしょ、ハニエル？」

あの時の台詞を言う。

ルディーは何も言わず、ハンドルを握り締め、無表情。

だからシンバは続ける。

「？あれは女の子だよ、天使じゃない？？天使だよ？？天使じゃない？？どうして天使を見た事がないのに、天使じゃないってわかるの？？」

「全く、可愛げのないガキだな。大人を言いくるめやがって」

舌打ちをしながら、そう言ったルディーに、シンバは、

「言いくるめた訳じゃないよ、本当に天使だって教えたかっただけ」

そう言った。

やがて、古びた教会の前を通り、シンバは身を起こして、その教会を見て、見送る。

それはシンバが幼い頃、通っていた教会。

この町に住んでいても、この通りやエリアは、ずっと避けていた。

「どこへ行くの！？」

そう聞いたシンバの台詞を無視して、

「お前、自分の首に多額の賞金がかかっているの知ってるか？」

ルディーはそう聞いた。

「え！？」

「お前を殺したい連中は山程いるんだよ、ルーセン・C・ファークレイ」

「……………」

「そんな顔をするな、教えておいてやりたかっただけだ。ルシファ―を崇める連中がいるのと同時に、ルシファ―を憎む連中がいるって事をな」

「そんなの言われなくても理解してる」

「だろうな、だから、お前は人の目から逃げるように、別人になった訳だし。どうだ？ 命を狙われるって気分は？ 殺人者が隣にいるかもしれないぞ？」

「……………きつと世の中の人、こう言うよ、？殺されて当たり前だ？って」

「お前を崇拜してる奴等もか？」

「そんな連中こそ、ルシファーが死んだら、一番に喜んで、どんな死に方だったか、ネットで書き巡らせるんだよ。知らない奴が、知らない癖に、知った風に」

言いながら、シンバはフツと笑みを零し、

「世の中には殺されて当然の人間がいるんですよ」
そう呟いた。

「…………お前は どうしてハニエルと言う少女を殺害したんだ？」

「何を今更」

「納得できないんだよ、俺は20年近く殺人課の刑事をして来て、いろんな死体を見てきたが、お前が殺した最初の死体だけが、どうしても納得いかない死体なんだよ。あれは異様ななんてものじゃない、あんなの有り得ない。言うなれば、異世界から出た死体だ」

「……………」
「あの殺しは…………綺麗過ぎる」

「二人目と三人目の死体は、醜いものだった。大体はそうだ。内臓や血が出てる出てない関係なく、身形が汚く乱れていたり、目を力ツと見開いていたり、物凄い形相のままっつてもある。殺害されるつてのは望んだ死ではないからな。綺麗に死んでる奴なんていない。例えば毒を飲んだとしても、それは飲まされたんだ、苦しんだ表情が醜く、喉を掻いた痕があったりする。だけど、あの殺しは綺麗過ぎた」

「……………」
「そう言ったルディーに、シンバは、まるで子供のようにクスクス笑い、

「言ったでしょ、彼女はハニエルだから。彼女は美しい天使なんだよ。ボクは人間と天使の違いを区別したんだ。本来の霊質に戻り美しく肉体を去る天使と、醜く死んで朽ち果てていく人間の違い。ちなみにボクは人間だから死んだら、汚いタンパク質の塊となるだけ」

そう言いながら、無邪気な表情をルディーに向けた。

運転中なので、そんなシンバをチラ見しながら、ルディーは、

「それがお前の本性か、ルーセン・C・ファークレイ」

と、そう言うと、シンバは笑いながら、

「ボクはシンバだよ、正義の味方シンバ・フォート」

言いながら、窓に流れる景色を見て、車が海岸沿いを走っているのに気付く。

「正義なんてもの、信じてるのか？ ルーセン・C・ファークレイ」

「ボクはシンバだって言ってるだろ！？ どこへ向かってるんだよ

！ 現場なんて嘘だ、ボクをどこへ連れて行く気なんだ！？ キリスト事件はもう解決してるだろ！」

取り乱すように、叫ぶシンバに、

「落ち着けよ、本当に現場なんだよ。わかるだろ？」

ルディーはそう言って、アクセルを踏み、スピードを上げる。

「まさか………ハニエルと同じ場所で………ロルも？」

「ああ、ロル・アスト。彼女の死体は異様だ。あんな死体を見るのは、二度目だよ」

嘘だと、シンバは目を見開き、ルディーを見る。

至って真面目な顔で冗談など言うような雰囲気でもないルディーに、シンバは口を塞ぐように、手の平を口元に持って行き、かなりの動揺。

車を止めれそうな場所に、駐車し、

「ちょっと歩くぞ、現場の近くは道が細すぎて、車で通れないからな」

そう言って、車を下りようとするが、シンバが車から降りる気配がないので、溜息を吐きながら、

「お前に見て欲しいんだよ、だから死体をそのままにしてあるんだ、来てくれなきゃ、お前を連れて来た意味ないだろう」

そう言った。シンバは無表情で、重く固い体を動かさず、車から下り

る。

「堤防脇の道から行こう」

そう言ったルディーの声は、耳に入っていないが、とりあえず、ルディーの後を追う。

テープで通れないようにした場所に、警察の制服を来た者が立っていて、ルディーは刑事である証明のカードを見せ、テープを潜って中へ入り、シンバも続く。

堤防の階段を下りて、沢山のテトラポットが目に入る。

サンサンと光が注ぐ海はキラキラ光っていて、美しく、昨日の雨のせいか、砂浜は波が来ない場所も硬く湿っている。

何人かの殺人課の刑事達と擦れ違い、シンバは現場に辿り着く。昨夜の雨のせいもあり、まわりは遠くの方まで足跡などなく、犯人である足跡も丁寧に消されている。

遺体は美しく、外傷はないと思われる。

白い羽で翼を描いてあり、針金を砂に刺して、風で飛ばないようにして綺麗に描いてある。

遺体の体は横になるよう捻っており、顔は少し俯き加減の真正面を向いて、右側の手は上へ向いていて、その手には何か長いものが持たれているかのように、砂に一本の線が引かれている。

その手は体の下であり、逆の左側の手は折りたたまれて腹部の辺りに置いてある。

足は体の下側となる右は、膝の所で折られ、左は真っ直ぐ下へとおりている。

シンバはそれを見ながら、

「まるでラファエロの絵画だ」

そう呟いた。

「ラファエロ？」

聞き返すルディーに、

「大天使ミカエルと竜という絵画のミカエルの格好そのままですよ」
シンバはそう答えた。

「格好？ 格好だけで、その絵だと断定するのか？」

「あの一本線、右手に交わるように砂に描かれている線のようなもの、あれは多分、剣だと思います、この体勢を無理に作ったとしたら、何かの意味があるとして、直ぐに浮かぶのはラフェエロの絵画です」

「なる程。言われれば。俺も異世界と感じたのは、絵画と重なったからかもしれない。だが、そこにメッセージ性はあるのか？」

「ダヴィンチとミケランジェロ、2人の複雑な天才の後を追うように現れたラファエロ。だが、彼は2人のような複雑さはない。只、才能を全て吸収する天性を持っていただけ。つまり、これはルーセンへのメッセージですよ、ルーセンのような複雑さはないが、ルーセンの全てを吸収していると言うメッセージ。ルーセン宛だと言う理由は、ラファエロの絵画にあるミカエルを真似たポーズをとらせてはいるが、これはミカエルではない、ハニエルだ。サイレント事件にも出てくる白い鳩の羽。白い鳩は愛情、平和、調和を意味する。それはハニエル召喚の呪文、愛情、平和、調和と同じ。」

「そうになると、やはりルーセンを慕い、ルーセン……ルシファー崇拜者か」

「違うと思います、その逆。ルーセンを憎んでるんでしょう。大天使ミカエルと竜という絵画は、ミカエルの足の下に竜がいて、その竜の喉をミカエルが踏みつけているんです。竜は凄惨な形相で舌を出して苦しんでいる。竜は悪魔であり、サタンである。つまりルシファーです。それだけじゃない、ラファエロの絵画を真似る事で、自分分はルーセンの全てを吸収しているというメッセージを送り、自分は何の考えもなく、只、ルーセンを真似ているだけと、ルーセンのルシファーという地位を墮とさない。コイツ、マジでムカつく！」

「……どちらにしろ、ルーセンに酷く感情を抱いている者と言う事だな」

ルディーはそう言うと、遺体の周りを見て、

「犯人は足跡を残さず、ずーっと手で消しながら、後ろ向きに帰っ

「たんだらうか？」

そう尋ねた。シンバはルディーをチラツと見て、直ぐに遺体に目をやり、

「行きも帰りも波間を歩いたんですよ、そうすれば足跡は波が消してくれる。手で消したのは、波間が来ない遺体の周辺と、帰る時、堤防の階段を登る所まででしょう」

そう説明し、更に、

「ボクがそうしたから」

そう言った。

寄せては返す波の音と唸る風。

白い翼の天使が、ここに召喚されているのを見ながら、シンバは、昨夜を思い出している。

ロアは生きていた。

笑顔を見せて、言葉を発していた。

今はもう笑顔も、言葉もない。

死とは、いと簡単に、全てを停止させる。

手の動きも足の動きも、瞳の輝きも、瞬きも、心音も、もう何も動かない。

肉体はいつか朽ち果てて、骨になり、骨も、ボロボロに崩れて、砂になる。

ロアを動かしていたものは、どこへ行ってしまったのだろう。

シンバはロアが人間である事を、よく知っている。

何故なら、彼女がどんなにソックリでも、どんな姿で、どんな風に、ここにいようとも、彼女は大天使八ニエルにはなれない。

シンバ、いや、ルーセンの中で、大天使八ニエルは、たった一人。

あの死で涙を流す事はなかったが、ロアが死んだ事は涙が溢れ出た。そして、犯人を残酷な程、無残に切り裂き、殺してやりたいと願った。

その願いが、神様に届き、叶うのならば、どんなに救われるだろうか。

ふと、目蓋の向こう、ハニエルの笑顔が浮かび、
？そんな奴等、死んじゃえばいいのにね？

優しい表情で、怖い台詞を吐く彼女が見えた。
それはルーセンが虐められた時に、虐めた相手に対しての台詞。

ハニエル、それはね、言うてはいけない言葉だった。

誰かが死ねばいいなんて、絶対に思っちゃいけない。

でもね、あの時のボクは、その怖い台詞が、どんなに救いだったか。

キミは紛れもない天使だったよ。

大天使の名に相応しく、綺麗で、月のように輝く瞳で、キミはハニエルだった。

だからキミは天使の世界へ帰ったんだ。

ねえ、ハニエル？

キミは元気でやってる？

ボクはね、人間だから、この世界で、苦しいんだよ………。

7・真実と偽りの間

シンバは溢れる涙を手の甲で拭くと、グツと力を入れ、もう涙が溢れ出ないよう、奥歯を噛み締める。

ロアに、次に会う時は、どんな話をしようか、ついさっきまで、考えていた。

レーチュルとも、次に会う時は友人としてと言うのも果たされないまま、まるで、それはシンバの希望を奪うように、殺害されて行く。

これは神が、罪を許せずに、ルーセンがシンバと言う別人になり、幸福を得る事を許さず、シンバへ、そしてルーセンへ罪を与え続けているのだろうか。

神は全てを見ていて、ルーセンがシンバである事を知っている。

犯した罪は、どんなに贖っても、どんなに正義を貫いても、消えない。

「犯人像が見えて来たな、ルーセンを憎んでいて、ルーセンの殺人と模倣した殺人をして、ルーセンを挑発するメッセージを送り、ルーセンの知り合いを殺害した。」

「ルーデーが腕を組みながら、そう言つと、
「それだけじゃない、犯人は彼女がハニエルに似ていると知ってるんだ」

シンバは、そう答えて、眠ったようなロアを見つめる。

「ハニエルに？ それはルーセンの最初の被害者の少女に似てるって意味か？」

「ルーデーさん、ボクに、サイレント事件の被害者達の写真を見せてもらえませんか？」

「ああ、いいだろう」

ルーデーは頷くと、少し小走りに、一番近くにいた殺人課の刑事の所へ行き、自分の車のキーを渡すと、車の中にあるファイルを持つ

てくるように命令した。

ルディーは直ぐにシンバの傍に来て、

「他に何か手掛かりはあるか？」

そう尋ねた。シンバは遺体をぐるりと違う方向からも見てまわり、
「・・・・・・・・左手を引っ繰り返して、手の平を見てもいいですか？」

シンバは遺体に触れてもいいか、ルディーに尋ねる。

「手？」

「ラファエロが描いた絵画の大天使ミカエルと竜のミカエルは、赤十字の盾を持っているんです。だけど遺体は盾を持ってない。その代わりに、手の平に十字傷を作って、盾を表しているかもしれません。それにサイレント事件は手の平に十の文字を刻むんでしょう？
見てみたいんです、その傷を」

「・・・・・・・・」

直ぐにオツケーの台詞が出ると思っていたら、黙ってしまったルディーに、シンバは不思議に思う。

「殺人課の刑事じゃないから、遺体に触れるのは駄目ですか？
なら、ルディーさんが、左手を引っ繰り返してくれませんか？」

「・・・・・・・・ひとつ、聞いておきたい」

「はい？」

「ルーセン・C・ファークレイは最初の被害者の少女の手の平に十字傷をナイフで描いたと供述しているらしいが、それは本当か？」

「はい」

「ナイフはどうして出てこなかった？」

「凶器は捨てました、只、それが出てこなかっただけ」

「・・・・・・・・手の平の傷を作った凶器は本当にナイフだったのか？」

「はい」

頷くシンバに、そうかと、ルディーは頷き、遺体に近付くと、左手を引っ繰り返した。

「な!?! なんぞ!? これ……………ナイフじゃない」

「ああ」

「焼印!?!」

「ああ」

「どづい事!?!」

「……………お前、本当に八二エルを殺害したのか?」

「え?」

「あの少女の手の平も、焼印だったんだぞ」

シンバの目が見開く。

「嘘だ!」

「嘘じゃない」

「嘘だ、だって、だって、手の平に傷があるって言ったじゃないか!」

「ああ、手の平に十の傷があつたよ、だがナイフで切つた痕だなんて誰も言つてない。言つたのは、お前だ」

シンバは呼吸を乱し、横腹を押さえる。

「よく聞けよ、この犯人は、昔のキリスト事件の最初の被害者の少女と同じ傷痕が左手にある。つまり、これが偶然でなければ、この事件の犯人は、被害者の少女の傷痕を知つていふ事になるんだ。それはキリスト事件の犯人であるルーセンか、その事件を担当した刑事か」

「オレじゃない!」

そう叫びながら、凄く冷や汗でびっしょりの顔で、シンバは横腹を押さえている。

「ああ、お前は少女の傷痕を知らないしな」

そう言われ、シンバはキツとルディーを睨んだ。

「何故そんな顔をするんだ? わからないな、少女を殺したのがルーセンでないと云う証拠になるんじゃないのか? それとも、どうあつても少女を殺したのは自分であると? 誰かを庇つての事か? 今更、蒸し返して悪いが、ハッキリさせようじゃないか。もしか

したら、お前が庇っている犯人が、サイレント事件の犯人である事も考えられる。だろ？」

「……オレは誰も庇ってない」

「お前、さっき言ったよな？ 被害者の少女とこの女性が似ていると。だとしたら、この事件の犯人は、余計にキリスト事件の犯人ルーセンであるか、その事件を担当した刑事かに絞られるんじゃないのか？」

「オレじゃないって言うてるだろ！ オレに彼女を殺す理由はない！」

「理由？ 只、そうしたいってだけでいいんじゃないか？」

そう言われ、シンバは力チンと来るが、何も言い返せない。

「だが、少女と女性が似ていると言う事は理由になる。そう思わないか？ 人は人を愛すると異常者になる。異常者が人を愛すると殺人者になる。で、お前は昨夜、彼女に自分の連絡先をメモして残しておく程、彼女を気に入ったんじゃないのか？」

「オレじゃない！ オレじゃないって言うてるだろ！ 聞けよ、オレじゃないんだよ！」

「お前だとは言っていない」

「言うてるようなもんだろ！ オレがもし殺したなら、今迄の事件はどう説明するんだ！」

「ああ、そうだな、サイレント事件の犯人と、この事件の犯人が同一なら、お前がずっと施設にいた時からの事件だからな、説明がつかない。だからお前が犯人である筈ないよな？ でも誰かを庇う事はできるよな？」

「……しつこいな、誰を庇うって言うんだ」

そう言ったシンバに近付き、ルディーは、さっきから横腹を押さえている手を振り解いた。

そしてシンバのシャツを捲り上げ、横腹を露わにさせた。

「なんだこれ？ 相当古い傷だな？ 虐待の傷痕か？」

そう言われ、シンバは捲りあがったシャツをグイッと下におろし、

「そうだよ、母親にナイフで肉を裂かれた痕だよ。時々、痛むんだ」
ルディーを睨みながら、言った。

「ナイフで……肉をね」

ルディーはそう呟きながら、冷や汗だらけのシンバを見る。

それは綺麗な十字となる傷跡で、確かに刃物で深く傷をつけた痕と
思われる。

「痛むのか？」

「痛いよ」

「急にか？」

「そうだよ、突然、痛みが走るんだよ。でも別にもう治っている傷
だよ、精神的なものらしいから大した事ない」

「それにしても凄い汗じゃないか」

「……」

もうルディーに対して、敵対心だらけのシンバは、ルディーを睨み
つけて、横腹の痛みに対し前屈み状態。

そこへサイレント事件のファイルを持って来た刑事が近付いてきて
「あの、お取り込み中、申し訳ないんですが、そろそろ被害者の写
真を撮らないと」

と、ファイルを差し出しながら、そう言った。

ルディーはファイルを受け取り、頷きながら、

「ああ、そうだな」

と、そのファイルをシンバに差し出し、

「サイレント事件の被害者達の写真だ」

そう言った。シンバは手を伸ばし、そのファイルを受け取る。

「帰るか」

ルディーは背を向けて、そう言うので、

「歩いて帰ります、通りに出ればタクシーも拾えますから」

シンバはルディーと一緒に帰るのを拒否した。

ルディーは肩をすくめ、

「好きにしる」

と、サツサと行ってしまふ。

シンバは横腹を押さえながら、遺体のロルを見下ろし、ジッと見つめた後、

「さようなら、ロル」

そう囁いて、横腹の痛みのでいで、前屈みになりながら、その場を立ち去る。

歩きながら、わからない涙が溢れ出た。

ロルの死が悲しいのか、ルディーに問い詰められた悔しさか。

マシユー、どうしよう。

オレがルーセンだってバレた。

ボクはやっぱりシンバにはなれないよ。

マシユー、話を聞いて。

誰もオレの話を聞いてくれない。

違う、誰もボクの話信じちゃくれないんだ。

ルディーだって、ボクを疑っている。

当たり前か。

人殺しを信用なんて、誰もできる訳ない。

オレだって、マシユーやロルを殺した犯人が本当の事を言っ

ても、絶対に信じない。

オレは………なんて事をしたんだろう………。

ルーセンは、なんて事をしたんだろう！

どうして人を殺せたんだろう！

どんな理由があっても、人を殺しちゃいけないかった！

ボクは、この世に出てきちゃいけないかった！

ボクの居場所なんて、この世界でつくっちゃいけないかった！

ボクは悪魔なのに！

世間の言う通りだと思った。

人を殺せる人間なんて、悪魔に決まっていると。

「うえっ………うっ………うっ………」

まるで小さな子供のように声を漏らし、泣くシンバ。

頬を伝う涙がボロボロと落ちる。

？シンバ、ひとつ嘘をつく、全部を嘘にしなければならぬ。ひとつ嘘がバレた時に、全部の嘘が崩れ、真実が出てきてしまうよ？レーチュルがそう言っていた事を思い出し、だけど、今更、何が真実かもわからないシンバは子供のように、只、只、泣きじゃくりながら歩く。

トボトボと家路に向かう帰り道を行く子供のように。誰も待っていないが、シンバは歩くしかなく、涙をボロボロ落としてながら行く。

刑を終えた時を思い出していた。

それはもう嬉しくて、15年、自分は頑張ったと褒めてあげたい気分、更に、外に出れる事にワクワクしていた。出た途端、今度は怖くなって、他の町には行けないと思った。

この町で精一杯だった。

なにもかもが目新しく、只のファーストフードにさえ、鼻血が出る程、感動を覚えた。

コンビニエンスストアでバイトしながら、刑事になる為の勉強をした。

刑事になるには、警察学校へ3年間通い、法の勉強や格闘術を身につける必要があった。

レーチュルが保護者、或いは保証人として、援助してくれて、常に支えになってくれていた為、その期待を裏切りたくはないと、必死に頑張ってきた。

卒業後には、直ぐにネット犯罪課に配属された。

一生懸命、働こうって決めた。

1人でも多くの犯罪者を捕まえて、ハニエルのいる天国に行けるよ。うになるうと誓った。

その全てが間違いだったと、シンバは思う。 。 。

そもそも、刑を終えた事が間違いだったとシンバは、教会の前、足を止めていた。

聖歌が聞こえたような気がしたからだ。

古い教会は、昔のような神々しさはなく、寂びれて、神聖さも感じられず、こじんまりとして見えた。

それはシンバが大人になったからかもしれない。

扉を押すと、ギギギツと嫌な音を立てながら開いた。

礼拝堂へ足を踏み入れると、こんな場所だったかなあと思う程、只の建物に見えた。

確か、ここだったような気がする、いつも座っていた長椅子の場所に腰を下ろし、正面に飾られてあるキリストの磔を見つめる。

色様々なステンドガラスの輝きがくすんで見える。

ガタンと音がして、振り向くと、驚いた顔でこちらを見ている神父が立っている。

落とした鉈を拾い、愛想笑いしながら、

「スイマセン」

そう言つて、近付いて来た。

「人が来るのは珍しくて。何より、私のよく知っている少年に後姿が似てたものだから」

神父はそう言つて、シンバをジツと見つめた。

昔と何も変わらない神父の黒い衣装のせいだろうか、年老いたイメージはなく、幼い頃も、この人はこういう物腰で、優しい笑みを浮かべる人だったなあ、神父に思う。

「……その少年つて？」

シンバは自分の事であるかとわかつていながら、聞いてみた。

「ええ、必ず、その席に座つて聖書を読んでいるか、そうしてアナタのようにキリストを、それはそれは熱心に眺める子で」

「……その少年の名は？」

神父は首を振り、

「名は知りません」

そう言つた。

それは嘘だと思つたが、もしかしたら名を忘れているのかもしれない

いとも思った。

だからシンバは、それ以上、何も聞けなくなってしまう。

「昔、ここも人が多く集まった教会だったんですけどね、今となつては誰も来なくて、無人教会になってしまい、時々、私がこうして掃除をしに来るんですよ」

「聖歌が聞こえたような気がしたんですが」

「ああ、それは多分、私の鼻歌でしょう、中庭で草を刈ってました」「鉈で草を？」

「生憎、鎌がなくて、倉庫の方に鉈があつたので代用したんです、草がもう伸びてて、誰も手入れをしないと駄目ですね」

言いながら笑う神父に、相変わらぬ優しい笑顔をする人だなあとシンバは神父の顔をまじまじ見つめてしまう。

「どうして人が来なくなつたんですか？」

「ちよつと事件があつたので」

「事件？」

聞きながら、それはキリスト事件だと直ぐにわかった。

「いえ、別に、お聞きになる程の事じゃない。では、ごゆっくりして行って下さい」

神父はペコリとお辞儀をし、鉈を持って、立ち去ろうとするが、

「神父さん、ボクの話聞いてくれませんか？」

シンバにそう言われ、神父は足を止め、シンバを見る。

キリストをジツと見つめるシンバの横顔を見ながら、神父は、

「ええ、いいですよ」

優しい笑顔で、承知した。

神父は鉈を置いて、シンバの隣に腰を下ろす。

だが、シンバは一向に喋る様子はなく、只、只、キリストを見つめ続けている。

神父も同じようにキリストを見つめる。

すると、

「あの人はキリストの為に磔になって、あんな風に今も尚、晒され

て、神じゃないのに祈られて、辛くないんでしょうか？」

シンバはキリストを見つめながら、そう聞いた。

「……アナタにソックリな少年が、同じ質問をして来た時がありました」

神父は昔を思い浮かべながら、そう言った。

もう神父はシンバがその少年である事に気付いているのかもしれない。

暫く、沈黙が続いた後、シンバは重い空気の中、口を開く。

「人間は真実だけを述べて生きる事はできない。だけど偽りだけを述べて生きる事もできない。その中間で、人間は天使と悪魔の間を行ったり来たりする。それが人間なら、ボクは間違いなく人間で、だけど真実を述べれば信じてもらえず、偽りを述べれば、それもまた信じてもらえず、キリストはそれをどうやって奇跡にしたんでしょうか？　ボクにはわからない。真実を述べて信じてもらえて、偽りを述べて信じてもらえて、でも犠牲を出しているのに」

「上目遣いで、磔のキリストを見ながら、そう言ったシンバに、神父は、

「キリストは1人です、キリスト自身が犠牲になったんです、だからキリストの言葉は誰もが信じるのです。そこにはキリストの犠牲の他、誰の犠牲もない。神はそれを御覧になっておられ、キリストに奇跡を与えたのです、ですが、それを信じられないアナタの言葉は誰も信じないでしょう、それもまた神は御覧になっておられるのですから」

そう教えを説いた。

シンバはフツと笑い、

「そうか、だからボクは神から見放され、地に堕ちたんだ」
そう呟いた。

ギギギツと嫌な音が響き、扉の開く音がして、振り向くと、

「シンバ、こんな所にいたのか、探したよ」

と、ロシュが現れた。

「ロシユ……どうして？」

「仕事が入ったんだよ、シンバがいなくなったから携帯で呼び出したんだけど、出なくて」

「そう言われ、ジーンズのポケットから携帯を取り出して見ると、着信が入っている。」

「探してたら、ルディーさんと一緒に出て行ったって殺人課の刑事に聞いてさ」

「言いながらロシユが近付いて来て、神父はロシユにペコリと頭を下げながら、席を外すように、外へ出て行った。」

「恐らく事件の現場に向かったんだろって聞いて、その後、僕もちょっと尋問みたいなものにあつてさ、シンバも疑われてるみたいな事を聞いて、現場の場所を聞いて、急いで車を走らせて来たんだよ」

「言いながら、シンバの斜め後ろの席に座り、」

「そんな泣きそうな顔して、何やってんの。辛いなら、どうして僕に電話して来ないの？」

「優しい言葉をかけてくれるロシユ。」

「同僚に話すより、神様に祈る方が良かったの？ でも神様なんて何もしてくれないよ」

「そう言ったロシユに、シンバは頷き、」

「知ってる」

「そう答え、また磔のキリストを見つめる。」

「ロシユ、現場、見てきた？」

「……ああ」

「ロル、死んでたね」

「……ああ」

「ロシユはロルと別れたがっていたから、調度良かった？」

「何言つてんだよ、そんな訳ないだろ！ ロルをあんな風にした犯人を許せないよ！」

「……オレも」

シンバはそう言うと、キリストから目を伏せるように俯き、
「被害者側の気持ちって想像できても、実際に実感しないと、何も
わからないもんだね」

大きな涙を膝の上に置いた拳にポツリポツリと落としながら、そう
言った。

シンバの背が震えているようで、ロシユは黙り込む。

「ロシユ、オレはさ、ルーセン・C・ファークレイなんだ」

「……は？」

「オレはルシファーなんだよ」

「何言ってるの？」

「いいよ、信じなくても。誰もボクという言葉なんて信じない」

「オレ？ではなく、？ボク？と言ったシンバに、ロシユは息を呑ん
だ。

そこにいるのはシンバだが、シンバではないのだと、ロシユは直ぐ
に悟った。

「いつか話すって言ったよね。だからロシユには話すよ。聞いてく
れる？」

そう聞かれても、簡単に頷けないのか、ロシユは黙っている。

「ロルが殺されたのも、ボクのせいだよ。ボクがハニエルを殺した
から、ハニエルに似ていたロルは殺されたんだ。ロルはね、ラファ
エロの大天使ミカエルと竜という絵画のミカエルの格好そのままの
姿だった。犯人は宗教絵画を残した歴史的人物の中でラファエロを
選び、ラファエロの描いた、大天使ミカエルと竜を選んだ。そこ
にはルシファーに宛てたメッセージがあるんだ。ダヴィンチやミケラ
ンジェロのような天才ではないが、それを吸収するラファエロのチ
カラ。犯人はルシファーのような考えは思いつかないが、模倣する
事はできるチカラがあり、そして、大天使ミカエルのように、ルシ
ファーを倒すという意味が込められている」

「なら、その絵画は選ばないんじゃないのか？ ラファエロの絵画
には、もう一つ、似た絵がある。墮天使を駆逐する聖ミカエルと言

う絵が。竜という表現でルシファーを結びつけるのはわかるが、墮天使としての表現の方が正しいと思うが？」

「いや、その絵は使えないんだ」

「どうして？」

「その絵のミカエルは、赤十字の盾を持ってないからだよ」

「盾？」

「どうしても手の平の十字傷は必要だろ？」

そう言われ、ロシユは、

「サイレント事件と同一人物なのか？」

そう聞いた。

「なんとも言えないけど、多分ね、そうだと思うよ、鳩の羽がそうだと語ってると思う。ここにサイレント事件のファイルがある。まだ見てないけど、多分、被害者達はナイフで手の平を切られてあるんだと思う」

「・・・・・・・・」

「ボクもそうだと思ったんだよ、手の平の十字傷って聞いて、直ぐにナイフで切られた痕を思い出したんだ。ボクの横腹のように」

「横腹？」

「ボクの体には、幼い頃、虐待された時につけられた傷が幾つか残ってる、その中でも横腹はクッキリとナイフが入った跡があるんだ。時々、痛むんだよ。昔ね、その傷を見たハニエルはボクを慰める為か、こう言っただよ。『ねえ、ルーセン、私ね、ルーセンに聞いてもらいたい事があるの？』」

言いながら、シンバはあの目を思い出す。

「ボクはね、体の傷を見られたらお終いだと思った。きっとハニエルも、みんなと同じように、気持ち悪いって思うに違いないって。でもハニエルは？私にもね、シンバと同じ傷があるの？そう言ったんだよ。直ぐに嘘だとわかったよ。だって、彼女の体に傷なんて、ある訳がない。勿論、手の平にもね」

「・・・・・・・・」

「ボクは知らなかったんだ、彼女の言っている事が真実だって事を」
「手の平に傷はなかったんだらう？」

「彼女は特異体質だったんだよ」

「特異体質？」

眉間に皺を寄せ、聞き返すロシユに、シンバはコクンと頷き、顔を上げ、キリストを見た。

「彼女は聖痕を持つ者だったんだ」

「聖痕？」

再び、ロシユは聞き返す。

「キリストが磔となった時についた傷が、信者達の体に現れる傷跡。科学的には説明できないチカラによって、キリストの傷と類似の傷が体に現れるというもの」

「それが被害者の手の平に？」

「そう。彼女はボクの横腹の傷を聖痕だと勘違いしたんだ。キリストが、ロンギヌスの槍によって刺された跡と類似の傷跡だと思ったんだよ」

「聖痕だなんて、バカバカしい。そんなの自傷行為だらう？ 自分でナイフで切ったんだよ、シンバのだって虐待の時にナイフで切られたんだらう？」

そう言ったロシユに、シンバは首を振り、

「彼女の聖跡はホンモノだったんだ。新約聖書のガラテヤの信徒への手紙6章17節において、聖パウロは聖痕を？イエスの焼印？と呼んでいる。つまり、本当の聖痕とは焼印を意味し、体に焼き跡のような傷が浮かぶんだ」

そう説明した。ロシユは開いた口が塞がらず、次の言葉が見つからない。

「だから凶器のナイフなんて見つからないんだよ、彼女はあの時、手の平に聖痕が出たんだ、只、それだけだった。そんな事、知らないボクは、警察の尋問誘導かと思って、最初は知らないって答えたんだけど、そう言えば、ハニエルはボクと同じ傷があるって言うって

いたなつて思い出したんだ。ボクと同じって事はナイフで切ったような傷だと思い、ボクはナイフで切つてやったと言つたんだ。辻褄は合わないよ、だって、彼女が傷があるって言ったのは前の話で、ボクがつけた傷となると、新しい傷となる。でもボクは彼女を傷付けてない。でも言えなかつた。それは？ルーセンと私だけの秘密だよ？そう言つて、彼女が傷がある事をボクにだけ教えてくれた事だったから。だからボクはボクがつけた新しい傷という事にしたんだ。なのに、それ以上、何も問われない事に、ボクは不思議にも思つていた。恐らく、警察は彼女の手の平の聖痕を見て、ナイフで切つた跡ではない事は事実だが、その凶器も出てこないのに、ルシファーが供述している事を立証する事はできなかった。つまり、立証できない以上、ルシファーの証言だけで真実にするしかなかつたんだ」

まるで、そうでしょう？と聞くように、キリストを見ているシンバそして、

「今回の犯人は、ハニエルが、聖痕が体に現れる特異体質だった事をよく知っている者と言う事になるんだ。ミカエルが赤十字の盾を持っていた左手と同じ、ロルの左手に、焼印がされていたから」

そう言つた。言いながら、サイレント事件のファイルを手で撫でながら、

「でも今までのサイレント事件の被害者はナイフで傷をつくつてる筈。そうしなければ、ルシファーに宛てたメッセージにならない」

そう言つた。

「…………ルシファーは死体をどこに隠しておけたの？」

「あの日、死ぬのはハニエルじゃなくて、ボクだったんだ。ボクの母親は売春婦で、いろんな人と寝ていた。その客からだろう、毒薬をもらったんだ。あの日は朝から妙だった。いつも冷たい祖父母も優しく、父もにこやかで、母はボクにオヤツを用意してくれていた。母から初めてもらったソレはまるで宝物のようで、食べれなくて、ボクが一番大好きな子にあげようと思つた。只、それだけの事だったのに、彼女は動かなくなつてしまった。それを知つた母は、彼女

の上等な服を見て、？なんて子だい！　こんな子と知り合いだったのなら何故早く言わないんだい！　金儲けできたのに！？ってね。彼女の死体を見て、最初に言った台詞がソレだよ。その後、？殺したのはお前だろう、自分で始末しな。本当ならお前が死ぬ筈だったんだよ、悪運の強い子だね？って、ボクのせいにした。祖父が大きなトランクを用意してくれて、ハニエルはそのトランクの中に入つて、ボクは彼女を捨てる為に、大きなトランクと一緒に家を出された。どうしていいか、わからなくて、ゴミ捨て場にトランクを置いて、教会へ向かった。教会からの帰り道、トランクはまだ置いてあつて、ボクはそのトランクを転がしながら、海へ向かった。明け方まで、ずっと　ー

シンバは瞳を閉じて、あの日を思い出す。

キラキラ光る朝日が、海を輝かせ、少年はトランクを開けた。

その海は、昔、溺死した者が大勢いたとかで、余り誰も近寄らない。だから、少年は少女と2人きりの時間を過ごした。

少女の顔は穏やかだった。

毒を飲まされるなど、思いもせず、少年を疑う事もない、安らいだ表情　。

あんまり綺麗だったので、ハニエルという名の通りだと、少年は思った。

少女を砂の上に寝かせ、少年は砂浜に翼の絵を描いた。

少女の手を広げるように置いて、足を少し折り曲げて、まるで空を飛ぶ天使だった。

折角とても綺麗なのに、自分の足跡が砂につくのが嫌だった少年は足跡を手で消しながら、トランクで引き摺った後も消しながら、波間に行き、そして、少女を見て満足した。

少女は死んだのではなく、天使になり、天使の世界へ帰っていたのだと思つたから　。

シンバは瞳を開け、再び、話し出す。

「大きなトランクはゴミ捨て場に捨てたけど、ずっとそこに置いた

ままだった。ボクはハニエルがいなくなった日々を過ごし、寂しい
と言う気持ちを知る。きつとハニエルも寂しいに違いないと、ボク
はある女の子をハニエルの所へ連れて行ってあげようと考える。そ
の女の子はハニエルと時々一緒にいた子だったから。だけど、ハニ
エルとその子の違いを出さなければと思った。人間と天使の違いを
再び、シンバは瞳を閉じ、昔を思い浮かべる。

倉庫から鉈を持ち出し、少年は女の子に声をかけ、神父様が呼んで
いるからと嘘を言っ、茂みに引きずり込むと、鉈で、女の子を殴
りつけ、殺害した。
綺麗なままの死体だと、人間らしくないと、少年は女の子を醜い肉
の塊になるよう、鉈で何度も痛めつける。

祖父母を思い出し、父を思い出し、母を思い出し、人間とは醜く、
汚いものであると、少年は女の子を見るも無残な姿にする。

悪い事だとは全く思わなかった。
シンバは瞳を開けて、

「ゴミ捨て場にずっと置いたままのトランクに死体は隠して、警察
もいなくなる時間を見計らって、女の子を海に置いて来た。女の子
だけでは寂しいだろうと、赤ちゃんも手にかけて……ボク
は捕まった」

そう言うと、振り向いて、ロシユを見た。

ロシユは無表情で、シンバを見ている。

そんなロシユに、

「謎は解けた？」

そう聞いた。そして、フツと笑みを零すと、

「何の謎もなかったでしょ？ そんなもんだよ。あれはキリスト事
件なんて呼ばれてるけど、只のつまらない事件なんだよ。世間が勝
手に大騒ぎして、勝手に謎にしたらだけ。でも1つだけ当たってる事
がある。ボクは悪魔だったって事。人殺しなんてする人間、人間じ
やないよ。今更、それに気付いても、もう遅いんだけどね」

そう言つて、前を向いて、キリストを見る。

「やつと真実を話せたよ。全部、話せた。もう偽りはない」
囁くように、そう言つて、少しだけ穏やかな表情を見せる。

そんなシンバの背後で、ロシユが、

「ロルの事件、お前は、ひとつだけ犯人のメッセージを見逃している」

低い声のトーンでそう言うので、シンバは振り向いて、ロシユを見る。

ロシユはメガネをクイツと中指であげ、シンバを見据えると、

「残念だよ、ルシファーが、こんなにも只の人間だったとは」

そう言つた。そして、

「だから一番大事なものを見逃すんだよ。真実も偽りも何も見えちゃいない。お前はその間にいながら、何一つ、わかっちゃいないんだ」

そう言つと、

「大天使ミカエルと竜、その決着が描かれている絵画から、お前は目を反らすのか？」

怖い表情で、そう問うロシユに、シンバはゴクリと唾を飲み込む。

そして、更にシンバを驚かすものが、目に入る。

ロシユは左手の手の平をシンバに広げて見せた。

そこには十字傷の焼印が。

そして、

「僕のホーリーネームはミカエルなんだよ」

そう言つと、ロシユは、信じられないくらいのとびきりの笑顔を見せ、

「やつと逢えたね、ルシファー」

そう言つた。

8・ルシファー vs ミカエル

シンバはガタンツと物凄い音を出し、長椅子に体をぶつけながら立ち上がり、ロシユを見る。ロシユは、そんなシンバに、

「大丈夫？ 顔色が悪いよ？」

と、ゆっくりと立ち上がる。

「……………そ、その手の平の傷？」

「聖痕だよ、おねえちゃんと同じみたいだ」

「おねえ……………ちゃん……………？」

シンバはハツとする。

そういえば、ハニエルには弟がいた。

シンバは、あの日を思い出す。

「おねえちゃん、僕、オシッコ？」

ハニエルと同じクリクリのグリーンの目を輝かせて、そう言った男の子。

「行ってくれば??」

ハニエルがそう言うのと、男の子は頷いて、駆けて行った。

「あれ弟のミカエル？」

聞いてないが、ハニエルがそう言うので、頷いた。

どうでも良かった、それが誰であれ、ルーセンにとって、ハニエル以外は全て？それ？に等しかったから。

「ロシユがミカエル？ 嘘だよ、だって、髪も瞳も、真っ黒じゃないか！」

「シンバ、加害者だけじゃないんだよ、この世界にいらなくなるのは。被害者側もね、全とつ変えしないと、やってけないんだよ。なんせ、世の中にはルシファーを崇拜するバカ共もいるからね、そうなる被害者側である僕達が非難を受ける場合もある。それだけじゃない。常にマスコミはついてまわり、異常な程、人の目に晒され、僕達は身内が死んだ悲しみだけで押し潰されそうなのに、更に

し、教えてやってるのに、未だ、誰もわかつちやいない」

「……本当にハニエルの弟？　ロシユが？」

シンバの膝の上から落ちたサイレント事件のファイルを拾い上げ、ロシユはメガネを中指で上げて、それをパラパラと見る。

「これにはコレクションされてないな、最初の僕の天罰を受けた者は猫だよ。ニヤーニヤーうるさいから、舌を切つてやった。僕はね、僕の声を聞かない者は大嫌いなんだよ、だから静かにしろつて言つても聞かない者は速攻で静かにさせる。ルシファー、キミならわかるよね？　誰も悲痛の叫びを聞いてくれないから、真実なんて述べれなくなる。その癖、何もかも、わかつた風に偉そうに分析して来て、？　可哀想に？　もつと人に甘えなさい？　アナタの居場所はあるのだから？　つて僕を哀れむ。僕が可哀想？　まさか！　人に甘える？　冗談だろ！　居場所はある？　フツ……ふははっ！　笑える。こんな汚い世界に僕の居場所なんてあるもんかっ！！！！」

ファイルを力一杯、床に叩きつけ、ロシユは大声でそう叫んだ。

ビックリして、シンバは腰をストンと床に落として、座り込んだまま、後退し続ける。

ロルの遺体を見て、犯人像を分析していた時、犯人に対し、本当にムカツクと思つた気持ちが無くなっていく。

ロシユがハニエルの弟である事、ミカエルである事、犯人である事、全てにシンバは首を振る。

ロシユの犯行全てはルシファーである自分のせいだと認めたくないシンバは、心の底から脅えている。

「ねえ、ルシファー？　一度、聞いてみたかったんだけど、キミは小動物を殺したり、人を殺す時に射精したりする？　よく書かれてたでしょ？　ネットです」

シンバは言葉が出てこなくて、首を横に振つて、只、後退を続けている。

「だよ。でもさ、殺人鬼つてそうらしいよね。僕には理解できない

いよ、この世の劣等生物でどう勃起しろって言うんだ」

言いながら、クッククツクツと喉で笑い、ロシユは、

「女と寝たつてつまんないよ。この世に、本当の温もりも真実愛の囁きもないんだから」

そう言つて、

「あるのは、興味だけ。だから神も見てるだけ」

そう呟いた。

シンバは、ロシユを見ながら、恐怖を知る。

ロシユをこんな風にしたのは、自分なのかと、自分さえも恐ろしく思う。

ロシユは神父が置いていった鉈を手に持つて、シンバを見る。

シンバはロシユとバツチリ目が合い、だが、怖すぎて、全く反らせない。

「ルシファー、僕は会いたかつたよ、キミに」

言いながら、近づいて来るロシユに、シンバは立ち上がり、長椅子にガンガンぶつかりながら、逃げ出す。

「僕はね、ミカエルじゃない時でも正義の名の職業でいようと決めて、刑事になつた。配属した所が殺人課じゃなかつた事にガツカリしたけど、キミがネット犯罪課に来てからは、ああ、やっぱり神様は見守るだけでも、正しい僕を見捨てはしないんだなあって思つたよ。最初はルシファーだつて、全然わからなかつたけど、僕に似てるなあとは思つて、キミを見てたんだよ。なるべく、息を潜めるようにして、誰にも気付かれないうよう、存在するキミに、何度教えてあげたかつた事が？そんなに目立たないように生きてても無理があるよ、だつて人間の中で悪魔は目立つでしょ？つてね」

「オレは悪魔じゃない。ロシユ、キミだつて天使じゃない」

「僕とおねえちゃんはね、同じ特異体質で、時々こうして手の平に聖痕が現れる。でもそれを誰かに喋る事はしちやいけないと神父に教わつたんだ。だつて聖痕はその昔、奴隷や罪人に押した焼印の事だから。僕は親に連れられて、この教会に来た頃から、聖痕が現れ

出し、おねえちゃんもそうだったみたいだね。神父以外の誰にも言っていないから親も知らない。なのに姉弟そろって、ルシファーにだけは打ち明けるなんて、ホント、キミは大した天使だよ、流石、神に一番愛されただけの事はある。今は一番、嫌われて、悪魔となっただけだね」

「違う、オレは悪魔じゃない！ ロシユ、キミだって天使じゃない！」

「キミが悪魔である正体を出せるような話をしてあげようか」

意味深に笑みを浮かべながら、ロシユはそう言うつと、

「レーチュル・マシユリー、彼はね、喉を切られる間際に、こう言っていたよ、？どうかシンバには何も知らせないでくれ？つて。そんな事言っただけでねえ、シンバは刑事だし、知らせなくても知っちゃうでしょ。それとも僕の正体をつて意味かな、？やっとシンバには友人ができて、あの子もそれを感じている？なんて言っただけだから楽しそうに、それは本当に楽しそうに、そう話し出した。

「幸せ？ 最後の最後まで自分を想ってくれてたなんて？ だけど彼が死体となり、一番涙を流していた息子さんへのメッセーシは何もなかったよ。そんなだから、この世は良くならないんだ、そう思わない？ 彼はルシファーではなく、息子さんを想い、息子さんに何か残して死んでいくべきだった。最愛の人は息子じゃなきゃ、息子さんも報われない。でもねえ、ソーシャルワーカーという仕事上、やっぱりルシファーを更正させた事は名誉なのかなあ、シンバは彼の仕事での成果そのものだった訳だから、そこに愛情はなく、只の自分の名誉を守る為だったんだろうね。人間なんて、そんなもんだよ」

「……黙れ」

「あの日、キミ達が帰った後、僕も酔いつぶれたふりをしてね、ロルにワンコールの電話をしたんだ。勿論、ロルは電話をかけ直して来る。その電話を酔って出れない僕の変わりにジャンさんが出てくれて、ロルに僕を迎えに来させた。僕を好きで好きでたまらない口

ルは直ぐに飛んできたよ。外に出て、酔ったふりのまま喧嘩をふっかけて、ロルを路上に置いて、ロルが乗って来た車で、キミ達を追った。キミ達がのんびり歩いてくれて良かったよ、直ぐに追いついた。彼が乗ったバスを追いながら、彼が下りたバス停で、僕も車を下りて、彼を呼び止めた。彼は僕を見るなり、そりやもう笑顔で、普通に近寄って来たよ、なんせ僕はシンバの友人みたいだからね。まさか、これから天罰が下されるなんて夢にも思ってたんだろうね」

「……………黙れって言ってるだろ」

「それからロル・アスト。彼女を最初に見た時は驚いた、おねえちゃんにソックリだったから。キミも驚いてたよね、僕もあんなだったよ、あんな風に驚いて彼女を見た。最初の出会いには偶然。でも次からの偶然は必然。僕は彼女を使えると思ったんだよ、どうせ人間なんて、どの人間も天罰を下されて当然。彼女だって例外じゃない。別にそれ相当の理由がなくても天罰を下す事は当たり前。だから僕は彼女に近付いて、彼女とキミを引き合わせる事を、ずーっと計画を立ててきたんだ」

「……………もういい、聞きたくない」

「キミの大事なレーチュル・マシユリーが、ミカエルにより天罰を下された後、直ぐがいいかなくなって思い、彼女が職場に訪ねてくるよつ、僕は彼女に対し冷たくあしらった。案の定、彼女は職場に来てまで、僕と話がしたいとランチを誘ってきた。帰りも待っていると言っていたが、僕は殺人課の女と自分のアリバイ作りに、その日は直ぐに帰った」

シンバはキツとロシユを睨みつける。

だが、ロシユはシンバのその強い瞳を脅える事なく、笑みを浮かべながら、

「どう？ 僕を殺したくなかったんじゃない？ ルシファー？」
挑発している。

シンバはロシユを睨みつけ、黙っている。

「神様はいつも僕の味方なんだよね、酷い土砂降りの雨で、映画館に入る口実を作ってくれた。眠くなるから映画は嫌だって言うからさ、どうやって目を疲れさそうか考えてたんだよ。でも、映画もつままない内容でさ、あの女、眠そうにしてたよ。僕の家に呼んで、睡眠薬入りのコーヒーを飲ませたら、グツスリ寝てた。深夜2時頃だったかな、ロルを呼び出すと直ぐに来たよ、僕と話をしたがっていたから寝起きだろうが、なんだろうが、来るよね。そしたらシンバの話が出たよ、？凄くいい人ね？だってさ。笑っちゃうよな、何にも知らないって本当に怖い事だね、相手はルシファーなのにね、いい人だって。あれは人じゃねえよって言いたくなるのをグツと我慢して抑えたよ、ホントに」

シンバこそ、今、怒りをグツと我慢し、抑えている。

「ロルは毒薬で殺す必要があつたけど、僕が差し出した缶コーヒーを何の疑いもなく口にしてくれて、今迄で一番、楽な天罰だったよ。薬だから即効性はないけど、数分後、苦しいって言い出して、僕が大丈夫だからと抱き締めると安堵した顔のまま逝き、彼女は綺麗な顔のままだっただろう？　もしかして、ルシファー、キミも八二エールをそうして安心させてあげたのかな？」

ロシユは、本当に楽しそうだ。

楽しそうに弾んだ声で話す。

「それから直ぐに車で海まで走らせ、ロルを砂浜に置き、ラファエルの絵画と似せさせ、手の平に用意しておいた焼印を押した。苦勞したのは鳩の羽かな、海風で飛ばされるし、針金で刺しても、砂が柔らかくて、なかなかうまくいなくてさ。雨が降ってくれた御蔭で、少し硬くなってくれたけど、小さな羽根を何枚も重ね、大きな翼にするのは時間がかかったよ。自分の足跡を消し、家に戻ると直ぐにシャワーを浴びて、海の二オイをとり、まだ眠っている女を裸にして、僕も裸で眠った。朝、目を覚ました女が全裸に驚いたが、？おはよう、昨日は良かったよ、また会いたいよ？って髪にキスするだけで、女は覚えてないなんて言えなくなる。しかも旦那がいる

から、余り公にいたくないだろう、僕と一緒にいたと言う事は。殺人課の刑事だし、だから、適当に僕のアリバイを言ってくれる事になる」

「そうまでして、何がしたいのか、オレにはわからないよ！」

そう叫んだシンバに、

「なんで？ わかってくれたでしょ？ 被害者側となる気持ち」

平然とそう言つて、ロシユはシンバを見ている。

「ロシユは被害者側だったんだろう？ 被害者の気持ちを理解してるんだろう？ なのにどうして加害者になるんだよ、どうして直接オレに攻撃して来ないんだよ」

「だって、一番、僕の気持ちを理解してくれるのはルシファーでしょ？ 只、ルシファーに足りないのは被害者側の気持ちでしょ？

攻撃するには、まだ何も知らなかったでしょ？ ルシファーは僕を殺したいと思う程、憎んでくれなきゃ。そして僕もルシファーを殺したいと思う程、憎んでる」

「……マシユもロルもオレのせいで」

「そうだよ、ルシファー、お前がハニエルをあんな風に砂浜に描き、面白おかしく晒し者にした時から、全人類がミカエルの裁きにより殺される運命になったんだよ」

「……まだ続けるのか？ こんな殺戮を」

「当然だろ、キリスト事件は世界中に広まり、人々はルシファーを崇めたり、ハニエルをイラストで描いたり、知った風に語ったり。それがどんなに侮辱行為か、愚かな人間共はわかつちやいない。だから、その余りにも許しがたい行為を止める為にも、全人類殺戮しかないだろう？ ノストラダムスの預言も遅くはない、真実にしてやろうと思うよ、全世界に大いなるチカラを墮とし、大爆発させ、人々の半分は死に至るだろう、ある国はウイルスに苦しませ、ある国は飢えに苦しみ、ある国は見えない敵に脅える。僕は感謝するよ、この時代に生まれた事を。パソコンなんてものが普及されて、キー1つで、世界を司る全ての機関が狂い出す事ができる、この時

代にね」

「……………ロシユ……………ごめん……………ごめんなさい」

シンバはロシユをこんなにも傷付けた事に謝罪するしか、思いつかなかった。

「なにが？」

「オレのせいで、そんな風になった事、オレのせいで、辛く過ごして来た事、オレのせいで、人間である大事な何かを失わせてしまった事、本当にごめんなさい」

シンバはそう謝罪する。

だが、ロシユは、

「ルシファー、キミはズルいよね」

と、許す筈もない台詞を吐く。

「そうやってキミは1人、人間に戻るの？ 八二エルを天使にしておいて？ 僕をミカエルだと知っておいて？ 僕は戻らないよ、ルシファー、キミを殺した後も、僕は続けるよ」

と、シンバの傍まで来ると、鉈を振り上げた。

シンバは咄嗟に避けるが、直ぐ横にあった長椅子が、鉈により割られ、木の破片が辺りに飛び散り、だが、ロシユは休む間もなく、再び鉈を振り上げ、シンバ目掛け襲ってくる。

シンバは逃げながら、自分が鉈で殺した女の子と赤ん坊も、こんな気持ちだったのかと、今になり、その恐怖を知る。

まるで教会ごと壊すように、手当たり次第、鉈を振り回し、壁などを壊すロシユ。

角の壁に追い詰められ、シンバは振り上げられた鉈を持ったロシユの腕を掴み、そこで2人、もみくちゃになる。

シンバはロシユの腹部を蹴りつけ、ロシユは、背後にあったパイプオルガンにぶつかり、だが、直ぐに向かって来るロシユに、またシンバはロシユの腕を掴み、鉈を捨てさせようとするが、ロシユもシンバを鉈で切り裂いてやろうと、物凄いチカラをみせる。

「ルシファー、必死だな、そんなに生きていか！ 自分は殺しておいて！」

「………くっ！」

シンバは喋る余裕がない。

歯を食いしばり、ロシユの腕を持ち、振り落とされる鉦を止める事で精一杯。

シンバはロシユを傷付けたくない、ロシユはシンバを殺したい、その2人の気持ちにはチカラの入りが違う。

どうしてもシンバを殺したいと思うロシユの方がチカラが上回る。人を殺してやろうと思う、人のチカラは、絶対的だ。

殺人鬼と格闘王が戦ったとしたら、殺人鬼が勝つだろうと言われる程、人は誰もが、そういうチカラを秘めている。

「ぐわあ！！！！」

鉦がシンバの左肩を抉るように裂き、シンバは激痛に悲鳴を上げた。鉦の刃に赤い血がつき、

「へえ、赤いんだな、ルシファーの血つて。まるで人みたいだよ」と、嬉しそうに言うロシユ。

シンバは左肩に激痛が走る為、手をあげられなくなり、片手で、ロシユの腕を掴み、鉦を止めるしかできなくなる。

鉦の刃がシンバの顔に近付いて来て、顔を背けると、再び、刃は左肩を直撃。

「！！！！！」

言葉にならない悲鳴。

今更、被害者が、どんなに痛かったらどうかと知るシンバ。

シンバはロシユを蹴りつけ、ロシユを後退させると、左肩から鉦を遠ざけた。

「さつきから邪魔な足だ」

と、ロシユは、鉦を投げて来た。

鉦はシンバの太腿辺りを掠り、壁に突き刺さる。

掠ったと言えど、かなりの肉を持っていかれ、肉を抉られたような

もの。

だが、シンバは悲鳴をあげず、壁に刺さった鉦を右手で抜くと、ロシユ目掛けてブーメランのように投げた。

まさかの攻撃に、無防備だったロシユは、鉦が腹部に突き刺さり、ガクンと足元から崩れ、前のめりにボタンと倒れた。

シンバは足を引き摺りながら、ロシユの傍に行き、ロシユを仰向けにすると、

「ロシユ……正義と悪なら、絶対に悪の方が強いって……
……そう言ったよね……」

そう言った。まだ生きているロシユは、シンバに手を伸ばす。その手を握り、？でもさ、僕は思うんだよ、正義と悪なら、絶対に悪の方が強いって？　そう言っていたロシユを思い浮かべ、シンバは、

「その通りだよ。正義と悪なら、絶対に悪の方が強い。だから悪に墮ちたら、二度と戻れない。どんなに正義を貫いても、一度闇に墮ちたら、二度と光ある場所には戻れない。だから絶対に罪を犯してはいけないんだ。絶対に」
と、ロシユの手を強く強く握り締める。そして、

「ロシユ……ごめんな、ボクのせいでキミの人生を変えてしまつて」

ロシユの顔に涙をポロポロ落とし、シンバは、ロシユに謝り続ける。そんなシンバの頭部を狙うように、ロシユは握られてない手で、腹部から鉦を抜くと、鉦を振り上げた。

だが、それをシンバは掴み、

「ミカエルは悪じゃない。悪はルシファアだ。キミは罪など犯した事はない。だから世間に晒される事もない。神は見てるから、大丈夫、キミは神の元へ帰るんだ」
そう言った。

ロシユはシンバの言葉に何か感じたのか、それとも、力尽きたのか、瞳を閉じた。

シンバはロシユの手から鉦を取ると、ロシユの手を祈るように組ま

せ、そして、鉈を持って、二人の戦いをずっと見ていたキリストを見上げた。

シンバは鉈を、キリスト目掛けて投げた。

キリストの心臓部分に、鉈はカツンと音を立て食い込んだ。

中庭にいた神父が通報したのだろう、パトカーの鳴る音が聞こえて来た。

「で、20年前から行われているサイレント事件は、お前の仕業だと?」

ルディーに取調べを受けるシンバはコクンと頷いた。

「信じられる訳ないだろう!!! いい加減、本当の事を言え!!!」
ロシユ・バートウを殺したのはなんでだ!? あの教会で何があつた!? お前とロシユ・バートウはもめたのか!? だからお前も怪我をしてるのか!?

「……オレがロシユを殺しました」

「それだけじゃわからないだろう! なら、レーチュル・マシユリもお前が殺したのか!? ロル・アストも、昔の少女のように殺害したのか!? どうなんだ!? 本当の事を言え!」

「オレが殺しました」

「そんな訳ないだろう! 大体、お前はサイレント事件が始まった頃、15年の刑を受けていた。それをどう説明するんだ!?

「オレはシンバ・フォートです、今迄で刑など一度も受けていません」

「……なんだと?」

「オレはシンバ・フォートです」

「お前、そんな供述して、本当にサイレント事件の犯人になるつもりか? もう未成年じゃないんだぞ? わかってるのか?」

「はい」

「なら、お前が犯人だと言う事を証明してみろ! サイレント事件の最初の被害者を言ってみろ!」

「……いちいちどなんだったか覚えてませんが、女の子です」

それはファイルなどを見なくても、わかる事だった。最初に猫を殺したというロシユ。

まだ幼かった彼が、最初に、手にかかる相手など、高が知れている。所詮、ボク達は自分より強い者には向かつてはいけない臆病者なんだよ。

天罰だの、そうしたかっただけだの、欲を満たすだの、殺人をソレらしく言うだけ。

本当は強い者には向かつていけない弱者に過ぎないんだ。

「お前、間違いなく死刑だぞ!？」

そう言ったルディーを見て、シンバは頷いた。
。「シンバ、ひとつ嘘をつく、全部を嘘にしなければならぬ。そうしなければ、ひとつ嘘がバレた時に、全部の嘘が崩れ、真実が出てきてしまうよ?」

レーチュルにそう教えてもらった通り、シンバはひとつの嘘を、全部の嘘にして、全てを自分のせいにした。

世ではサイレント事件解決が報道され、シンバは少年Aではなく、シンバ・フォートと名前を出され、顔写真も公表された。

正義の名の下にある組織から出た悪は、人々から賛美なく、罵声ばかりが飛んだ。

シンバが死刑所へ送られた後、ジャンは、刑事の任務を下りる為、辞表を出した。

「お前がなんで責任を感じるんだ?」

そう聞いたルディーに、ジャンは、

「俺は知らない間に、奴等を傷付けていた。適当な事を言って、奴等を追い込んで、奴等に深い傷を与え、そんな事思ってもせず、奴等の心を何度も何度も刃物で切り刻んでいたに違いない。俺の態度や言葉、ひとつひとつ、奴等は苦しかっただろう」

そう言った。

「奴等?」

「シンバとロシユ。奴等を責められる人間じゃないんだよ、俺は」

「それを言うなら、俺もだ」

と、ルディーはジャンを見ながら言ったが、ジャンは、顔を伏せた

まま、

「情けねえよな、俺達大人がよ、揃いも揃って、子供達に罪を重ねさせてるんだ」

悲しい事を言う。

「奴等にちゃんとした居場所を与えられる人間がいるとしたら、それこそ神だよ」

ルディーはそう呟き、空虚を見つめた。 。
実際、殺人者を相手にする刑事さえも、元殺人者と聞いて、今の現状を見つめる事はできない。

幾ら、今、正義を振り翳す者になっていたとしても、過去、犯した罪を蒸し返し、疑い、恐れ、遠ざかってしまう。

悪魔でも天使でも、ましてや神でもない人間は、許す事などできないのだ。 。

そして、その罪は許してはならないのだ。

その日、外は霧雨が降り、少し肌寒くて。 。

13階段を登ろうとするシンバに、最後に言い残す言葉は何もなく。 。

まだ痛む足を引き摺りながら、ゆっくりと階段を登る。

一步、一步、階段を登りながら、思っていた。

この先、行き着く所で、両親にも祖父母にも、レーチュルにも、ロルにも、ロシユにも、鉈で殺害した少女や赤ん坊にも逢えないだろうと。

ハニエル、ボクはキミにも逢えないだろうね。

きっとボクは、みんなとは違う所に行くんだろう。

だって、ボクはキリストの心臓を鉈で突いたのだから。

神はソレを見ている。

だからボクは天国でも地獄でもなく、きつともう二度と出れないよう、無になるんだ。

ずるいよね、ボクは。

ロシユの言う通りだよ、ボクはズルイ。

無になりたい為に、キリストを晒し者にしたようなものだ。

最後まで計算高くて、嫌な人間だね、ボクは。

ボクの人生で、たった1つ、幸せだった事はキミに逢えた事だよ。

キリストが逢わせてくれたようなものだったのに、ボクはキリストを許せなかった。

ボクに逢わなければ、キミの人生は今も尚、幸せに続いていたに違いなかったから。

ボクが無になったら、キミは生まれ変わるんだよ？

今度は幸せに。どうか永遠に幸せに、キミが前世のまま誰からも愛されますように。

もうシンバにはハニエルの幻も見えなくなっていた。

ルーセンが見ていた優しいハニエルの幻。

ハニエルの穏やかだった表情、優しい笑み、その全てが思い出せない。

ルーセンが都合良くハニエルをつくってしまっただんじじゃないか、そう気付いた時から、ハニエルを思い出せなくなった。

誰もシンバを愛する者はなく、想像でさえ、許されず、大きな罪だけを背負い、今、たった一人で、最後の時を向かえる。

その後、キリスト事件を類似した事件はアグルスで、今も尚、続いているが、徐々に犯罪は減り始めている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8859m/>

神は見ている

2010年10月16日15時46分発行